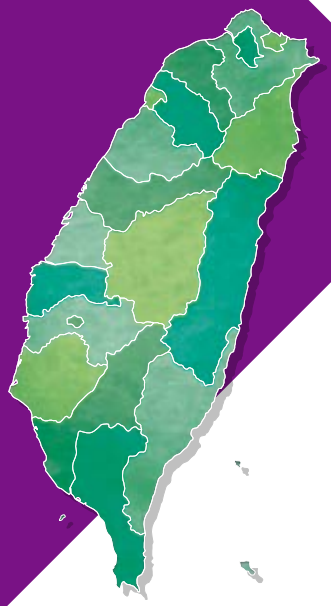
第18回

日台文化交流 青少年 スカラシップ 2021



実施報告書

第18回

日台文化交流 青少年 スカラシップ 2021

実施報告

日本と台湾の青少年による文化交流の促進を目指す「第18回 日台文化交流 青少年スカラシップ2021」は、作文とスピーチ（中国語・台湾語）の2部門で学生から作品を募集し、388点の応募がありました。

第18回は、新型コロナウイルスの影響を考慮し、表彰式および研修旅行は実施しませんでした。代わりに、8月18日（水）にオンライン交流会を実施しました。

審査委員 ※敬称略・順不同

審査委員長

渡辺 利夫　拓殖大学 顧問

作文部門審査委員

張 温 恭　台北駐日経済文化代表処 広報部 次長
阿古 智子　東京大学大学院 教授
室舘 勲　株式会社キャリアコンサルティング 代表取締役
林 翠 儀　自由時報 東京特派員
河崎 眞澄　産経新聞 論説委員

スピーチ部門審査委員

顧 欽 誠　台北駐日経済文化代表処 広報部 部長
馮 彦 國　横浜中華学院 理事会秘書長
呉 育 珊　東京中華学校 訓導主任
林 翠 儀　自由時報 東京特派員
河崎 眞澄　産経新聞 論説委員

主 催：産經新聞社

共 催：台北駐日経済文化代表処

協 賛：JR東海　MITSUI & CO.　臺灣新聞社 TAIWAN NEWS

協 力：外交部　教育部　台湾日本関係協会　Taiwan THE HEART OF ASIA 台湾観光局

後 援：公益財団法人 日本台湾交流協会 Japan-Taiwan Exchange Association　自由時報

入賞者 ※順不同

作文部門

大　賞

葉山 瑶　早稲田大学 4年

優秀賞

美好 愛華　東京学芸大学附属世田谷中学校 2年
大家 衣穂理　奈良県立青翔高等学校 3年
山口 彩　東京大学教育学部附属中等教育学校(中学) 3年
増尾 諒一　東京大学教育学部附属中等教育学校(高校) 1年
松室 美胡　広島県立広島叡智学園中学校 3年
野口 祈桜　南山大学 4年
座間 耀永　青山学院中等部 3年

奨励賞

白石 琴美　愛媛大学附属高等学校 1年
進藤 ひより　愛媛県立松山東高等学校 3年
中沢 遥花　東京大学教育学部附属中等教育学校(高校) 1年
横川 蓮奈　臺大國際華語研習所
藤波 尚子　三重大学 3年
福本 有杏　東京大学教育学部附属中等教育学校(高校) 1年
中川 紗優梨　東京都立八王子東高等学校 3年
村松 奏哉　東京大学教育学部附属中等教育学校(中学) 3年
佐藤 万優子　国際基督教大学 4年
川北 輝　広島国際大学 大学院 2年
上澤 亜衣子　星陵中学・高等学校 高等部 2年
折井 空弥　東京大学教育学部附属中等教育学校(中学) 3年

佳　作

平松 彩　成蹊高等学校 1年
竹下 慶　熊本県立第一高等学校 2年
柳澤 日和梨　群馬県立中央中等教育学校(高校) 3年
菅野 真奈　東京農業大学第三高等学校 2年
杉森 翔太　早稲田摂陵高等学校 3年
足立 響　東京大学教育学部附属中等教育学校(中学) 3年
橋本 七美　札幌市立札幌開成中等教育学校(高校) 2年
稲田 ちとせ　東京大学教育学部附属中等教育学校(高校) 1年
新間 井子　東京大学教育学部附属中等教育学校(高校) 1年
西田 梨紗　東京大学教育学部附属中等教育学校(中学) 3年

スピーチ部門

大　賞

山内 佳祐　佐賀大学 3年

優秀賞

谷 俊作　大阪大学 4年
田村 夏琳　関西学院千里国際高等学校 2年
河野 共喜　元培医事科技大学 大学院 1年
南 愛莉　青山学院大学 4年
廣松 佳依　東京中華学校高等部 2年

奨励賞

増田 敏　学校法人日本教育財団 HAL大阪(専門学校) 四年制 2年
大月 駿輔　青稜高等学校 2年
清家 瞳　東京大学 大学院 博士課程 3年
野母 明美　玉川学園高等部 2年
岡 佑紀　東京中華学校高等部 2年
馬渕 逸文　横浜中華学院高等部 2年

※学校名、学年は2021年8月現在

台日「善の循環」を次世代につなげたい

台北駐日経済文化代表処 代表 謝 長廷

受賞者のみなさん、おめでとうございます。

「日台文化交流　青少年スカラシップ」は、日本の青少年に台湾の歴史や文化、近年の社会の発展などへの認識を深めてもらい、今後の台湾と日本の新世代の交流の懸け橋となる人材となっていただくことを願い、今年で18回目の開催となりました。

台湾と日本の友好関係は、百年以上前からの民間交流の蓄積によるもので、先人たちによる努力の結晶です。この良好な関係が末永く続いていくためには、若い世代のみなさんが若いうちから両国の交流に取り組むことが重要です。

友好をつなげていくためには、言葉の力が必要です。スピーチの「話す」能力を若いときから鍛えることは、将来の友情が末永く続くことに大きく寄与することと確信しています。また、作文の受賞者のみなさんは、作文に込めた台湾への思いを、今後自分なりの形で実践していただければと期待しています。

今年の夏は、東京オリンピック・パラリンピックが新型コロナ対策と並行する中での開催となりましたが、日本の方々が台湾の選手の活躍にも注目し、大きな声援を送っていただいたことは、選手にとっても大きな励みとなりました。

台湾のマスク支援や、日本からのワクチン支援は、困ったときはお互い様、「持ちつ、持たれつ」の家族のような関係が築かれていることを示しています。台湾と日本の間に助け合いの「善の循環」が形成されていることは、隣国関係の模範であり、世界平和のモデルとなるものです。

台湾や日本の防疫の取り組みに注目し、世界各国が一致協力して伝染病の拡大を食い止める大切さなどに理解を深めていただければと思います。そして、ウイルス感染の流行が落ち着いたときに、またみなさんが台湾に来ていただけることをお待ちしています。どうぞ今後も台湾と日本の関係発展に関心を寄せていただきますよう、よろしくお願いいたします。みなさんのご健康と学業のさらなる発展を祈念いたします。

経験を文章にしよう

拓殖大学 顧問 渡辺 利夫

作文部門で大賞を授けられましたのは、早稲田大学4年生、葉山瑶さんの「青緑の双眸の向こうに」です。一読、この作文の文章レベルは相当に高いと私は直感しました。短いエッセイの中で、瑶さんは台湾に対する思いをふくよかに詠いあげています。

瑶さんのお母さんは台湾人です。そのお母さんのお母さん、つまりは瑶さんのおばあさんの瑶さんに対する愛情を描いて、瑶さんは自分のルーツが台湾にあることに何か誇らしいものを感じ取っています。この感覚が文章の中にみずみずしく表現されていて心打つものがあります。

スピーチ部門で大賞となりましたのは、佐賀大学3年生の山内佳祐さんの「日本と台湾の架け橋として」です。佳祐さんは15年間を台湾で過ごし、義務教育を台中市の日本人学校で受けたという経験の持ち主です。佳祐さんは情に厚く、人を思う気持ちの強い親日的な台湾人に囲まれて幸せな生活を送ったようです。そして「日本文化も台湾文化も全て私の一部です」と語り、また「私の生活はどちらかの文化が欠けていてもあり得ない生活でした」と述べています。このことを流暢な中国語で語り、また審査員の質問にも明晰に答えていた佳祐さんの笑顔が今も印象に残っています。

皆さんは家庭、学校、海外研修、地域社会、その他いろんな場でさまざまな経験を積んでこられましたよね。しかしそれらの経験も、これを言語化（つまり文章化したりスピーチにしたりすること）をしませんと、それらはいつの間にやら人生のささやかな経験としてほとんどが忘れ去られていきます。

経験はこれを言語化することによって初めて「経験知」となり、これが一つの確かな経験知のブロックとなります。別の経験を言語化してもう一つの経験知のブロックができあがっていきます。いくつもの経験知のブロックを積みあげていきますと、簡単には崩れない経験知の大きな塊となります。この塊こそが人間として成長したことの何よりの証なのです。作文やスピーチをさらに磨きあげていって欲しいものです。

作文部門

受賞のコメント（大賞・優秀賞）

大賞

早稲田大学 4年
葉山 瑶

第二の故郷、台湾に想いを寄せて

この度は、「日台文化交流 青少年スカラシップ」作文部門におきまして、大変光栄なことに大賞に選出していただき、心より感謝申し上げます。

台湾は私にとって母の国であり、祖母の国です。小学生くらいまでは年に一度、家族で長期休みに一週間ほど祖母の家に泊まり、母のきょうだいやその家族など親戚が大勢やってきて大所帯で時を過ごしていました。中高となるとなかなか時間が取れなくなってしまいましたが、あの頃の思い出は不思議とくっきり記憶に刻まれています。そのお陰なのか、成長してからも台湾は、懐かしく心惹かれる故郷のような存在です。

大学では第二外国語に中国語を選びました。自分のバックグラウンドを鑑みて、満足に中国語を話せないままでは恥ずかしいと思ったためです。また、普段の講義で学びを重ねていくなかで、比較文化、多文化、複合アイデンティティといったワードに興味を惹かれていったのもおそらく必然だったのだと思います。生まれや人種や民族といった枠に囚われず、人の共通項を探して人をつなぐ。そういった考えに心を惹かれました。複数の文化の中に育った自分だからこそ持ちうる視点が、国際交流の役に立つのではと思うようになりました。そのためにはまず自分の背景から語れるようにならなくては。そういう思いもあり、大学2年生の夏には台湾大学に短期留学をしました。久しぶりに訪れた台北は、おしゃれなカフェが増え、タピオカの店など新しい文化が発展していたけれど、変わらず懐かしく温かみがありました。私は充実した日々を過ごし、そして帰国する前に祖母に会いに行き――それが最後の挨拶となりました。

筆を取って祖母について書くのは私にとってとても勇気のいることでした。新型コロナウイルス感染拡大の影響で、最期の前にもう一度だけ会えたチャンスを失い、私たち家族は未だ複雑な悲しみを抱えていました。それでも、いつでも私と台湾をつなげる存在である母が背中を押してくれ、この話を綴ることができました。祖母と、そして母に、この受賞を捧げたいと思います。今度は私が日本と台湾をつなぐ人間になろうという想いを強くして。

最後になりましたが、このような素晴らしい機会を提供くださった産経新聞社の皆様、台北駐日経済文化代表処の皆様、ならびに各協賛・協力・後援企業および団体の皆様に、深く御礼を申し上げ、ここに結びとさせていただきます。

優秀賞

東京学芸大学附属
世田谷中学校 2年
美好 愛華

天国のアツォーに捧げる賞

この度は優秀賞をいただき、ありがとうございます。

中学入学後、ある先生と出会い、そしてこのコンクールに向けて作文を書く中で、私の一つのルーツである台湾について考えるようになりました。

台湾について知る時、とても大きな存在となったのは数年前に亡くなった、私の曾祖母アツォーです。アツォーがもし生きていたら、この賞をどんなに喜んでくれたでしょう。この賞を私の大好きなアツォーに捧げたいと思います。

新型コロナウイルスが落ち着いたら、イエイエ、ナイナイの住む台湾に行きたいです。

優秀賞

奈良県立
青翔高等学校 3年
大家 衣穂理

未来は若者たちからやってきます

16歳の女子高生の「v Taiwan」への書き込みがきっかけで、台湾では2019年にプラスチック製ストローが全面的に禁止されました。新型コロナウイルス感染拡大により、私たち中高生は短い学校生活の中で多くのものを失いました。そんな状況でも、できることを見つけもっと良くしていこうと、日本でも多くの中高生が行動を始めています。オードリー・タン氏の著書に「未来は若者からやってきます」という言葉があります。若者の一人として、未来のほんの一部でも、指し示せる存在になりたいです。この度は有難うございました。

優秀賞

東京大学教育学部附属
中等教育学校(中学) 3年
山口 彩

入場順は「たいわん」として

この度は日台文化交流 青少年スカラシップの優秀賞に選んで頂きありがとうございます。まさか受賞するとは思ってもいず、家族中で驚きました。

私はこの作文で、台湾に興味を持ったきっかけがリオオリンピックの開会式の入場行進だったと書きました。その時の台湾の呼称が「中華台北（チャイニーズタイペイ）」だったからです。しかし、今回の東京オリンピックでは、プラカードと場内アナウンスは「チャイニーズタイペイ」であるものの、入場順は「台湾」の音で大韓民国とタジキスタンの間でした。まさに今、私たちは歴史の変わり目にいるのだなと実感しています。

優秀賞

東京大学教育学部附属
中等教育学校(高校) 1年
増尾 諒一

歌唱がもたらす日台交流

この度は、優秀賞という名誉ある賞に選出していただき、誠に嬉しく思っております。

日台間には種々な文化交流があり、テーマにするにはどれも甲乙つけがたく、苦慮しましたが、今回は、2011年に台湾で催された「NHKのど自慢」について書かせていただきました。「歌」も日台を強く結びつける要素として含まれることを学び、感銘を受けました。

大勢で歌うことが難しいご時世ですが、一刻でも早く新型コロナウイルスの感染拡大が終息し、歌唱が日台交流をより活発なものにしてくれることを心より願っております。

優秀賞

広島県立
広島叡智学園中学校 3年
松室 美胡

報恩 ～故郷への感謝を込めて～

この度、このような素晴らしい賞に選出していただき、本当に嬉しく思います。

私は親の仕事の都合で、二歳半から十年間ほど、台湾で生活していました。今回は、私が台湾で過ごした際の経験、特に剣道を通じた台湾人の優しさについて書かせていただきました。剣道は日本の武道の一つですが、台湾でも多くの人々に親しまれています。そのため、台湾での剣道の稽古を通じ、私には台湾人の友達が多くできました。

私が多くの台湾人にお世話になったように、いつか日本の文化で台湾の人々をもてなし、恩を返していきたいです。

優秀賞

南山大学 4年
野口 祈桜

台湾の〝素食〟と環境問題

この度は優秀賞に選出していただきありがとうございます。私は今回、台湾の素食（ベジタリアン食）と環境問題の関係性について書きました。日本でも食糧危機への懸念の高まり等からベジタリアン食が徐々に普及していますが、実は台湾は国民の1割以上がベジタリアンで、街の至る所で素食の文字を見かけます。肉・魚料理の再現度が非常に高く、初めて台湾で素食を口にした時の感動は今でも忘れられません。

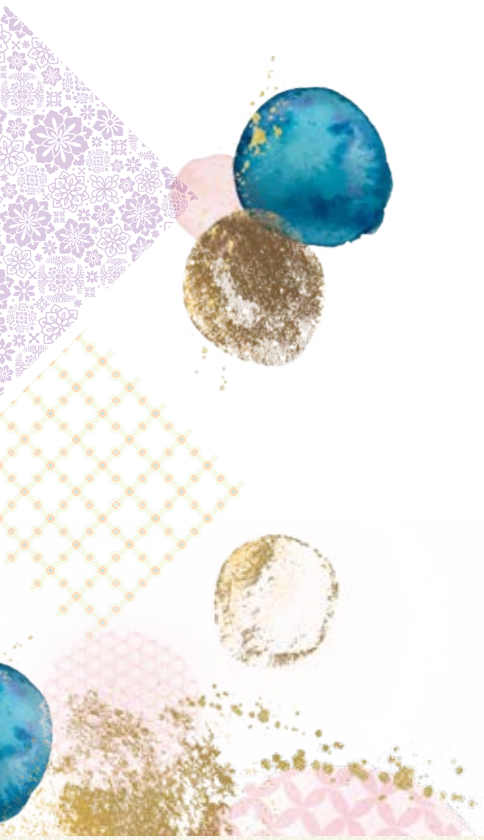
私の作文を通して一人でも多くの日本人が素食に興味を持ち、また環境問題についても考えるきっかけになればとても嬉しいです。

優秀賞

青山学院中等部 3年
座間 耀永

これからの日台交流のために

この度は、優秀賞に選出していただきありがとうございます。私は、友達に「主食はタピオカ」だと揶揄される位タピオカ好きです。台湾への興味はタピオカからでしたが、現在は、台湾情勢に関心があります。教育財団で台湾の学生たちと日本語で交流をするパイロットケースに参加したことが転換でした。最近ではオリンピックを巡る政治的な考えや、オードリー・タンさんの話にまで及んでいます。この感染症が終息した暁には真っ先に台湾を訪問し、リアルな交流をして日台関係の構築に貢献したいと思います。



スピーチ部門

受賞のコメント（大賞・優秀賞）

大賞

佐賀大学 3年
山内 佳祐

大賞をいただいて

この度はこのような有意義なプログラムに参加させて頂くだけでなく、大変名誉ある賞まで受賞させて頂き、誠にありがとうございました。ご紹介をしてくださった方、審査してくださった方、祝ってくださった方、多くの方々に心から感謝申し上げます。スピーチにおいては、台湾と繋がりが深いというバックグラウンドを生かして、感じた文化の相違点や感謝の気持ちを表現しました。

この賞を頂けましたのは、今までに沢山の素敵なご縁があったからと感じます。15年間台湾で生活しておりましたが、何一つ文化や言語に対しての不自由がありませんでした。それは、大事に育ててくれた両親や恵まれた友人関係、温かい台湾人のおかげです。そして、毎年、日本から家族と共に赴任して来られる学校の先生方の存在も大きかったです。生徒に対する情熱が非常に強く、時には親身に、時には厳しくご指導をして頂きました。台湾のことについても、日本のことについても一緒に学んでくださったことが印象的です。ですので、この度大賞を受賞できたのは私一人の力ではないと強く感じております。

日本と台湾にはそれぞれの良さがあると考えております。まだ20年しか生きていない人が何を言っているのだと思われるかもしれません。しかしながら、今までの経験から私はそう感じてきました。この度参加された他の学生もそうではなかったのでしょうか。今の状態に満足することなく、両国の歴史についても、経済についてももっと知ればその思いは、根拠が増して来て、また誰か他の人に影響を与えると考えます。ですので、これからもより多くの事に挑戦し、多くを学ぶことに貪欲でいたいと存じます。「日本と台湾の架け橋として」大好きな日本も台湾もより良くしていける人材になるだけではなく、その上でグローバルな視点を持ちつつ、社会に貢献できる人になれるよう精進して参ります。

このような貴重なプログラムに参加させて頂いた事で、私は台湾に対する強い思いを再認識するだけではなく、同じ様な思いを抱いている多くの学生や彼らがされていた体験について深く知ることができました。同時に、自分の未熟さも実感しましたが、一生の財産にもなりました。

最後になりましたが、改めまして素晴らしい機会を提供してくださった産経新聞社、台北駐日経済文化代表処、並びに各協賛・協力・後援の企業及び団体の皆様に深く御礼申し上げます。

優秀賞

大阪大学 4年
谷 俊作

コロナ禍での日台交流を通して

この度は優秀賞を授与していただきありがとうございます。思い入れのある台湾についてのスピーチで賞を頂けた事、大変嬉しく思います。コロナ禍で日本と台湾の交流は制限されていますが、直接会えないからこそ、日台の人々の互いへの「思い」がより強くなっているように感じます。私もこの二年、台湾の友人との交流を続け、台湾への思いがさらに強くなりました。この思いを大切に、これからも魅力溢れる台湾について積極的に学び、いつか日本と台湾のさらなる関係発展に少しでも貢献できる人材になりたいです。

優秀賞

関西学院
千里国際高等学校 2年
田村 夏琳

日台の架け橋として

今回は日台文化交流 青少年スカラシップの優秀賞に選んでいただき、とても嬉しく思います。最も胸が弾んだ瞬間は最終審査に進みスピーチを実際に行うことができると知った時でした。自分の故郷である台湾に対する思いや、常に台湾人で有りながら日本人としても生きてきた私の経験を色んな人に共有できるかと思うと、ワクワクが止まらなかったのです。これからも日台の架け橋として、歴史と文化の学びを深め人と繋がる経験を続け、両国が永遠に繋がるよう努めていきたいです。

優秀賞

元培医事科技大学
大学院 1年
河野 共喜

台湾で発酵食品を研究する

このたびはスピーチ部門の優秀賞に選出していただき、感謝いたします。日本と台湾をつないでオンライン上で、スピーチができたことを嬉しく思います。私は台湾で留学生活を送る上で、自身の台湾華語がどの程度成長したか知りたく応募しました。今回はその良い指標となり、さらに語彙力を伸ばしていこうという新たな目標ができた機会でもありました。台湾で発酵食品を研究する中で、新たな言葉や漢字との出合いが多くあるからこそ、続けて学びたい気持ちへ繋がります。今後、台湾の発酵食品である臭豆腐の魅力を日本へ伝えたいです。

優秀賞

青山学院大学 4年
南 愛莉

大学生活最後の思い出

この度は、このようなコンクールに参加することができ、さらに優秀賞をいただけたことを大変光栄に感じております。英語を専攻している私が、第二外国語である中国語のスピーチコンクールでこのような素晴らしい賞をいただける日が来るとは思ってもいませんでした。さらに、私が本当に心の底から思っていることを伝えたスピーチでこのような評価をいただけたことが大変嬉しいです。これからも目標に向かって勉学に励むと同時に、日台民間交流の一端を担えるような人材を目指し、日台友好に貢献できるよう精進してまいります。

優秀賞

東京中華学校高等部 2年
廣松 佳依

日台文化交流 青少年スカラシップを通じて

この度はスピーチ部門に参加することができ、更に優秀賞までいただけて、とても貴重な経験となりました。発表の際には、参加者皆さんの様々な台湾に対する思いや、台湾での経験などを聞けて、共感する点が多かったとともに、台湾に関する新たな知識も増え、大変有意義なひとときを過ごせました。今後、私も少しでも日台交流のお手伝いができれば大変うれしく思います。最後になりますが、改めてこのような素晴らしい機会をくださった主催者並びに共催・協賛・協力・後援の企業や団体の皆様に深くお礼申し上げます。

大賞

青緑の双眸の向こうに

早稲田大学 4年　葉山 瑶

台湾では、「アーマー」というと、おばあちゃんのことを指す。文字にして書くと「阿嬤」となる。私にも「アーマー」がいた。台湾で生まれ育った私の母の母であり、私の祖母だ。そういう理由で、物心つく前から台湾はとても身近であった。それこそ家庭の文化に色濃く滲み出ていたのだと思う。父母で異なるルーツを持つ子どもは、一般的に母親の国の文化の影響を受けやすいと聞くが、台湾出身の母を持つ私はその例に漏れず台湾の色のある家庭で育ったのだった。ルーロー飯、ちまき、大根餅（私たちは大根ケーキと呼んでいた）、牛肉麺。私を構成してきた普段の食事も、「台湾」抜きに語ることはできない。もっとも、小さい頃はそれが当たり前で、他の家庭との違いを認識したのはずっと後のことだったのだが。

私の母はたくさん兄弟姉妹がいて、「アーマー」の家族は大所帯だ。おじ、おば、いとこたち。小さい頃「アーマー」の孫たちの中で私はいちばん年下だった。だからだろうか、言葉も通じなかったのに、とても可愛がってもらった。私が日本で生まれた時「アーマー」はすでにかなりの高齢だったが、こちらまで飛んできたという。慣れない異国のスーパーで買い物し、赤ん坊だった私をお風呂に入れた。頭を洗うことを中国語で「洗頭」というが、この滞在がよほど思い出深かったのか、「アーマー」に会うといつも、私の名前を呼んだあと「洗頭、洗頭」と言いながら赤ん坊の頭を洗う仕草をしてみせて、嬉しそうに笑っていた。あんまり嬉しそうに笑うので、どことなくくすぐったさを感じたのを覚えている。言葉はほとんど通じなかったし、遠く離れた場所で生まれ育った孫だったのに、無条件で懐に入れて抱きしめられるような、そんな温かさがあった。

「アーマー」の子どもは皆すでに独立し、家庭を持っている。週末や休みの時期に孫やひ孫を連れてくることがあっても、「アーマー」は普段、7人の子どもを育て上げた大きな家で一人きりだ。その寂しさを感じ取った母は、私にぬいぐるみを送ろうと提案したのだった。ちょうどその時期、私が某テーマパークで迎え入れたぬいぐるみに母娘で熱を上げていたこともあり、同じ種類のものをもう一体買って台湾に送ることにした。それが五年前。「アーマー」はとても喜んでいたが、大事にするあまり箱にしまって、たまに来るひ孫に遊ばれないようにしていたようだった。母はもったいないと言い、二年前台湾に帰ったときに箱から出し、「アーマー」の腕に抱かせたそうだ。それ以来、普段の生活でも近くに置くようになったらしい。

それと同じ頃、夏休みに私は台湾に短期留学をした。中国語を磨くためである。周りの友人とは違ったルーツを自覚した際、その違いを自分のアイデンティティに組み込むのか、または蓋をして周りに合わせようとするのかは、人によるだろう。私の場合は、前者だった。中国語を勉強するのに台湾を選んだのは、その意味で深い思い入れがあったからだ。台湾は母の国というだけでなく、私にとって第二の故郷といえる。留学中、日本人だと明かすと「台湾人みたい」と驚かれたり、私の中国語が「台湾の発音だね」と言われたりすると、言い表せない嬉しさが胸に滲んだ。台湾は、私を語るにはもう切り離せない存在となっている。

帰国する前、「アーマー」に会いに行った。記憶よりもっと小さく感じた。帰り際にはしわしわの手で私を力強く抱き締めて、少し泣いていた。次はいつ会いに来られるかと、私は考えていた。

それが、私が「アーマー」を見た最後だった。

今年の三月の末、「アーマー」は亡くなった。老衰だったという。本当は昨年に一度、会いに行く予定だった。新型コロナウイルス感染症の影響で、なかったはずの後悔を噛み締めた人はどのくらいいるのだろうか。葬式に参列した母が電話越しに「アーマー、燃やされちゃったよ」と言った時、最後に見た涙を思い出した。しがみつくように私を抱きしめた、細い腕。数えるほどしか会ったことのない「アーマー」は、私にとって「台湾」そのものだった。異国だが異国でない、「帰る場所」という思いを沸き立たせる、「台湾」そのものだったのだ。

母は台湾から、一体のぬいぐるみを連れて帰ってきた。私たちが贈ったあのぬいぐるみだ。抱きしめると、まだ微かに「アーマー」の家の、少し薬っぽい匂いがした。母がぬいぐるみの小さな手を握って呟いた。

「アーマー、寝る時はいつも頭の上にこの子を置いてたよ。死んじゃった時も…頭の上にいて、アーマーは静かに眠ってたんだって」

それから毎晩、私は同じ種類のぬいぐるみを二つ、頭の横に並べて寝ている。時々「アーマー」の方を抱き上げてその青緑の目を覗き込む。この目は「アーマー」の最期を見守っていたのだろうか？　同じようにじっと見つめてくる両の目の向こうに、私は小さくまるまった姿を見つけるのだ。私にとっての、台湾を。

優秀賞

アツォー

東京学芸大学附属世田谷中学校 2年　美好 愛華

「アツォーは『やまとなでしこ』の日本教育を受けたからね」

これは、五年前に亡くなった台北に住んでいた父方の曾祖母に「どうして日本語が話せるの？」と私が聞いた時の答えです。

台湾は日清戦争後の１８９５年から約50年間日本に統治され、アツォーは家では家族と台湾語、学校では小学校一年生から中学校卒業まで日本語で日本の教育を受けていたそうです。それを聞いたときの私はまだ小さく、「統治」ということが何なのかよく分かりませんでしたが、『やまとなでしこ』という言葉がとても印象に残りました。

アツォーは毎朝、日の出前に起き、お化粧をして近所にある国父記念館へ散歩に行き、そこでいつも同年代の友人たちと日本の歌を歌っていました。日本に来たときは私の母方の曾祖母とカラオケに行ったり、曾祖母が台湾に行ったときはカラオケに連れていったりと、同世代の二人はとても仲良しだったのを覚えています。また、大好きなＮＨＫ国際放送を見る時、ソファーに座っていても、ピーンと背筋を伸ばして見るような人でした。

そんなアツォーに会いに、小さい頃私たち家族は夏休みによく台湾に行っていました。台湾語が全く分からず、あまり中国語も分からない私に、台湾の人たちは、日本語で

「日本から来たの？ いいわね」

「日本素敵ね」

など、たくさんの人が日本の事を褒めてくれました。

また、台湾の人たちは、当時まだ小さかった私の弟に電車やバスに乗るとすぐに席を譲ってくれたり、日本語で話しかけてくれたりとても親切にしてくれました。

東日本大震災では台湾の人たちは日本に多額の寄付をしてくれ、なぜ台湾の人たちはこんなに日本に良くしてくれるのか、私はとても疑問に思っていました。

昨年、私は中学校に入学しました。そして、私の父が台湾出身だと知った地理の先生が、日本と台湾に関するＤＶＤを貸してくださいました。そのＤＶＤでは、私の知らなかった歴史が語られていました。その中に、アツォーと同じような日本語を話すご老人が出てきました。ご老人が懐かしそうに日本の歌を歌う姿を見て、もっとアツォーに色々なことを教えてもらいたかったな、と思いました。アツォーの生きてきた時代のことや、日本と台湾の関係、そして台湾出身の父と日本出身の母を持つ私にとって、一つのルーツである台湾の人々の暮らしや考え方について知りたい、と強く思うようになりました。

新型コロナウイルスワクチン接種が世界で始まる前、台湾の新型コロナ対応が注目されていました。昨年春、日本でマスク不足が深刻だった際、台湾はたった三日で保険証を使ったマスクの注文システムを完成させ、世界を驚かせました。また、島国という地理的利点と過去のＳＡＲＳでの経験を活かし、海外からの入国者への14日間の隔離、違反者への高額な罰金など、徹底した水際対策を行い、他国とは比較にならないほど新型コロナ感染者を抑え込んでいました。

実際、受験が終わったのにどこにも旅行に行けないと嘆く私に、台湾に住む私のイエイエとナイナイ（台湾の祖父母）は「友達と温泉旅行に行ってきました！」と自助餐（バイキング）を楽しむ写真と、マスクを外して、満面の笑みの集合写真を送ってきていました。世界、そして日本が変異種の恐怖に怯えている中、台湾国内では今までの日常を楽しめていたのです。

しかし今年４月末、パイロットの感染を発端に、台湾でも感染者が爆発的に増えてしまっています。そんな中、日本政府が台湾へのワクチン提供を検討するというニュースが飛び込んできました。日本は台湾と国交を結んでいないけれど、両国が互いの強みを学び合い、協力し合えたら本当に嬉しいです。

私の「愛華」という名前には、「中華民国（台湾）を愛する」という意味が込められています。この名前が決まった時、アツォーが占い師さんに占ってもらったそうです。

「この子は将来外交官になるでしょう」

私は将来、小学校の先生になりたいと思ったり、タカラジェンヌになりたいと思ったり、時には医者になりたいと思ったり、まだ将来の夢ははっきりと決まっていません。しかし、日本と台湾の血が流れている私だからこそできることを、今から少しずつ探していきたいです。

もしも占いが当たって、私が日本と台湾の関係に携わることができたら、それもとても素敵だな、と思います。その時までに、アツォーが誇りに思っていた『やまとなでしこ』をさらに進化させた、しなやかな強さも兼ね備えた21世紀版『やまとなでしこ』になっていたいです。

優秀賞

「大家好」と言える日まで

奈良県立青翔高等学校 3年　大家 衣穂理

「大家好」

はじめて会う台湾のかたに名刺を差し出すと、父は決まってそう言われるそうだ。名刺に書かれた「大家」という姓が台湾のかたにとって珍しく面白く感じ、親しみとユーモアを込めて言ってくれるのだと、嬉しそうに父は言っていた。だから、父の名前はすぐに覚えてもらえる。「大家」は台湾や中国では「みなさん」「大家好」は「みなさんこんにちは」という意味だと教えてもらった。今まで姓について、あまり深く考えたことはなかったのだが、父の話を聞いて、台湾の方々とのコミュニケーションのきっかけになる素敵な姓だと思うようになった。と同時に、私は台湾の方々に親しみを感じ、いつか訪れてみたいと思っていた。

そして昨年、私たち家族は台湾を訪れる計画をしていた。父の永年勤続特別休暇を利用して、少し長めの期間を台湾で過ごそうと、楽しみにしていた。父は台湾を訪れても、仕事であわただしく日々が過ぎてしまうので、いつかゆっくりと訪れたいと、私たちに言っていた。私ははじめて訪れる台湾に、とてもワクワクしていた。しかし、新型コロナウイルスが世界中に感染拡大したことにより、この計画は取りやめざるを得なくなった。

そのころ、日本の情報番組は台湾の偉大な人物について大きく取り上げていた。その人はオードリー・タン氏。台湾のコロナウイルス感染拡大の封じ込みを成功させた、台湾IT担当大臣である。番組で紹介されるオードリー氏の生き方、思考、そして生まれ育った台湾という国に、今までよりさらに興味を抱き、「台湾に行ってみたい」という気持ちから、「台湾を学びたい。台湾で学びたい」という気持ちに変化していった。昨年12月に刊行された「オードリー・タン　デジタルとAIの未来を語る」という著書は、私にとってとても興味深く、学びとなる一冊だった。なかでも心に残っているのは、16歳の台湾の女子高生の「vTaiwan」への書き込みのことだ。「vTaiwan」はオードリー氏たちが構築した、オンラインで法案を討論できるプラットフォームである。女子高生は、プラスチック製ストローと皿の段階的な使用の禁止を求める書き込みをした。この提案に対して、請願に必要な5000人の署名がすぐに集まり、法制化され、今ではプラスチック製のストローは、紙やサトウキビを使ったものに変わりつつあるのだという。参政権を持っていない16歳の女子高生の提案が社会を変えたことに、私は大きな衝撃を受けた。日本では、緊急事態宣言期間の休校長期化を受けて、高校生が9月入学案の署名をネットで呼びかけ、賛成派の署名が2万人を超えた。政府でも検討されたが、この時期に導入となるとさらに混乱を招く、という理由から気付けば見送られていた。これが台湾なら、積極的な議論を行い、導入するか否かに拘わらず、十分な検討がなされ、納得のいく理由が示されていたのではないかと思うのだ。

次に心に残ったのは、台湾の若者は「自分たちの主張は年長者に耳を傾けてもらえる」という自信をもっているということだ。これは、日本の若者も年長者も、大いに注目すべきだと思う。私自身もそうだが、若者が大人に何かを提案したり要望したりすることは、とてつもない勇気が要る。しかしこの自信があれば、年長者とも対等に向き合うことができ、発言することができる。それによって、若者の新しい発想が、国を変えていけると思うのだ。

著書の中で、「未来は若者たちからやってきます」という、オードリー氏の言葉がある。

子どもだから、高校生だからといって、その思いや考えを軽視するのではなく、すくい上げ、耳を傾け、議論することが、これからの日本にとって重要なことではないか。そうすることで、若者の投票率、政治への関心を高め、よりよい日本にしていけるのではと思う。

私は現在、中高生向けの校外活動を紹介する情報サイトの運営メンバーとして、様々な分野で活動する高校生を紹介している。ボランティア活動や貧困・教育格差・環境・コロナ禍を乗り越えるための問題等に取り組み、日本そして世界を良くしていこうという意識を持って活動している高校生は決して少なくない。日本の高校生の提案も、国を動かせるほどの力があると私は確信している。これからも、そんな高校生を紹介し、少しでも多くの人に影響を与え、台湾の女子高生に近づけるよう、努力していきたい。

台湾を訪れることが出来る日が来たら、台湾の高校生や同世代の人たちと、台湾と日本の未来について共に考え、ディスカッションしたい。その日まで、台湾と日本について、もっとよく知っていこうと思う。「大家好」から始める交流が、とても楽しみだ。

優秀賞

台湾は国か地域か

東京大学教育学部附属中等教育学校（中学）3年　山口 彩

台湾は国なのか、それとも地域なのか。台湾を国と正式に認めている国は15カ国あるが、国際連合では台湾は国として認められておらず、地域とされている。しかし、私は今まで台湾を「国」だと無意識に思ってきたし、今でも国だと思っている。私の他にも台湾を国だと思っている人もいるのではないだろうか。また、なぜ台湾は国として認められていないのか。私がどうして台湾が国だと思うかを考えるようになったのは、オリンピックを観戦していたときだと記憶している。

それは、2016年に開催されたリオデジャネイロオリンピックの開会式の入場行進をテレビでみていたときだった。台湾が「中華台北」の名称で参加し、入場行進では中華民国（台湾）の国旗ではなく中華オリンピック委員会旗を掲げていたのだ。不思議に思った私は、母に「なぜ台湾として出ないのか」と聞くと、「国連では正式に国と認められていないからだ」と教えてもらった。今まで無意識に「台湾は国だ」と思ってきた私は初めて知った事実に驚いたが、テレビの実況で「205の国と地域が参加している」と言っていたのを聞いていたので、「だからこういう風に言っていたのか」と考えることができ、これがきっかけとなってなぜ私は台湾が国だと思うのか、台湾はなぜ国として認められないのか、を考えるようになったのだ。また、最近では台湾の新型コロナウイルス封じ込めが世界で話題となり、私は再び台湾に興味を持つようになった。

私が台湾を国だと思う理由は、主に2つある。1つ目は、台湾は国が成り立つための条件が揃っていると思うからだ。国家を構成する4つの要素は、領土、国民、主権、そして主権を基に他国と関係を築く力がある事だ。領土は台湾島という土地があるし、国民は台湾に約2360万人の人が住んでいる。主権とは、「自分たちで自分たちのことは決めることができ、他の国から口出しされたり、考えを押し付けられたりしない」（サクラサクセス　学習内容解説ブログより）ということで、台湾には台湾政府があり、私はここで台湾のことを自分たちで決められていると思うのだ。そして台湾は、ツバル、マーシャル諸島共和国をはじめとする、計15カ国との外交関係がある。あとは台湾を他国が国と認めるかどうかなのである。アメリカなどには「これは鴨のように見え、鴨のように泳ぎ、鴨のように鳴く。したがって、これはたぶん鴨である。」ということわざがあるという。BBCのウェブサイトでは、このことわざとともに、台湾は「国家的存在だと認められる。ただし、承認されていないだけだ」と話す国際関係の専門家の言葉が紹介されていた。私も、その通りだと思う。

2つ目は、現状は中国と台湾は両者が統一されておらず、台湾が独立してもいないからだ。今まで、台湾は中華人民共和国に統治されたことがない。台湾は地域名であり、国名ではなく、憲法上の正式名称は「中華民国自由地区」だ。中華民国と、中国の正式名称である中華人民共和国は違うもので、元々は第二次世界大戦後に中華民国内で中国国民党と中国共産党の内戦が起こり、劣勢だった中国国民党がだんだんと中国領土を中国共産党に奪われ、結果的に台湾に立てこもったという経緯があり、この中華民国の中国国民党が現在も台湾で一政党として重要な役割を担っているので、中華民国が台湾にいるような感じだ。だから、国だと言えると思うのだ。

このように、私は台湾は国を形成するための条件的に見ても国と言えると思っている。

ではなぜ、国と認められないのか。それは、中国が関係していると言える。最近中国は、香港を自分たちの思い通りにし、政府の利益にしようと香港への締め付けを強めているのだ。そして、香港の次は台湾が狙われるのではないかと言われ、台湾の人も中国政府と香港の動きに注目している。現に、台湾政府や台湾に暮らす人の多くは独立を望んでいるが、中国が台湾の独立を認めず、国連で国と認めさせまいと国連と他国に圧力をかけているようで、中国が台湾独立の承認をすれば台湾はすぐに国として独立が認められるという噂もあるのだ。中国は、世界を手に入れようとしている。台湾も日本も、これからの地球を、自分たちの未来を真剣に考え、行動しなければならない。

優秀賞

「のど自慢」が築く日台歌唱文化

東京大学教育学部附属中等教育学校（高校）1年　増尾 諒一

2011年10月2日。台湾の國父記念館にて老若男女の美しい歌声が会場を包んだ。「NHKのど自慢イン台湾」はこの日に収録され、29日に台湾・日本で放送された。

「NHKのど自慢」は1946年のラジオ放送から75年続く長寿番組であり、今もなお、日曜お昼のお茶の間を盛り上げている。のど自慢は海外でも収録されており、1998年の日系移民百年を記念したブラジル・サンパウロ以来南米各国ハワイ、アメリカ、中国、韓国そして台湾など多数行われている。先に挙げたどの国々でもかなりの人気を博していたが、台湾は群を抜いており、応募総数は、台湾開催以前最多であったブラジル開催の約2倍超を誇った。また、のど自慢は日本の歌を歌うことがマストであるため、これまで海外開催の応募者は、日系人、現地在住の日本人が大多数を占めてきた。しかし、台湾では応募者の多くが台湾人であったことも特徴的である。日台交流は食文化やスポーツ、観光など多岐にわたるが、歌唱もその象徴であるといえるのではないか。

「のど自慢イン台湾」には、日本と同様出場者を決める予選審査がある。予選審査は國父記念館で行われ、応募者、その家族、友人、応援団が会場でひしめき合っている。台湾では以前から開催要望の声が寄せられ、署名活動も展開した末に現地の台湾日本人会、台北市日本工商会で構成される実行委員会との共催によって実施が実現したそうだ。その影響か、出場資格が与えられる25組に対して応募総数は1480組、倍率は約60倍と類を見ない白熱した戦いをもたらした。前述したように、のど自慢では日本の歌を歌うことが義務付けられているが、幅広い年齢層の参加者が多種多様な曲と熱意をもって予選に臨んだ。小林幸子の「迷い鳥」を歌った日本舞踊の師匠を務める84歳の女性、郷ひろみの「お嫁サンバ」を熱唱した新聞記者の30代男性など多くの人々が接戦を繰り広げた。本番では、観客の見守る中、25組が圧巻の歌唱力を披露した。そして、五木ひろしの「暖簾」を歌った男性がグランドチャンピオンに輝き、のど自慢は無事に幕を下ろした。

台湾在住のジャーナリスト、片倉佳史さんは「台湾人は、本当に歌が好きです。日本の歌も大好き。日本語世代はもちろんですが、その下の世代、植民地時代を全く体験していない世代もみんな日本の歌をよく知っています。とてもうまいんですよ」と語る。新型感染症の流行以前、昼間には歌好きのご老人たち、夜には会社帰りの男女グループに人気の台湾のあるカラオケスナックでは杉良太郎、安全地帯、矢沢永吉、西田佐知子、三橋美智也、桑田佳祐など日本語だけでなく台湾語でカバーされた日本の曲が盛んに歌われていたそうだ。他にも、中正記念堂前の広場に許可を得て自前のカラオケセットを準備し、千昌夫の「星影のワルツ」台湾語バージョンを好む初老の女性や出勤前のサラリーマンなどの「会員」が一堂に会して毎朝好きな曲を熱唱するカラオケ愛好グループが存在した。これらのように、台湾で日本の歌唱が好まれる理由には台湾領有初期の日本の歌唱教育が大いに関係していると考えられる。歌唱教育は主に小中学校で行われていたそうだが、童謡や戦前の歌謡曲が子供から大人にも浸透し、文化として根付いたのかもしれない。その影響の大きさを感じさせるある出来事がある。終戦後3年、日本人が引き揚げていった基隆の港で船の出港と同時に波止場に残る台湾人から日本語の「蛍の光」の大合唱が起こったという。戒厳令下の堂々と日本語の歌を歌えなかった時代にも関わらず、台湾人、日本人が互いに手を振りながら歌ったそうだ。「さようなら」、「さようなら」という思いと共に。

「NHKのど自慢」では「明るく楽しく元気よく」を番組のモットーとして掲げている。長寿番組として続く理由についてあるプロデューサーは「人はうれしいときも、悲しいときも歌いたくなる。歌は人格の一部なのかもしれません。けれど番組は歌自慢ではなく、さまざまな土地や暮らす人々の魅力を伝える人間ショーなのです」と語る。

日台の政治的関係は戦後から現在にかけてあまり良くなっているとは言えない。だが、東日本大震災で救助隊が早急に駆けつけてくれたこと、昨年の4月に「日本加油（日本頑張れ）」と書かれたマスク200万枚が台湾から寄付されたことなどは政治や貿易では測れない日台の友好関係を象徴する出来事であったと思う。これらの出来事は台湾人の親日精神に基づいており、先に紹介した日台の歌唱文化が、両国をつなぐ「架け橋」として影響を与えてきたことが推測できる。

今日、新型感染症が世界規模で猛威を振るい、各国に危機的状況をもたらしている。先行きの見えない不安を払拭し、立ち向かう勇気を与える手段として「歌」の必要性が一層に求められる時代なのかもしれない。

〈参考文献〉
書　名：「帰る家もなく」
著者名：与那原恵
出版社：ボーダーインク

優秀賞

故郷に恩返しを！

広島県立広島叡智学園中学校 3年　松室 美胡

台湾、それは私の故郷であり、たくさんの思い出が詰まった場所だ。私は二歳半の頃、父の仕事の都合で台湾に引っ越し、小学校を卒業するまでの十年間を台湾で過ごした。物心ついたときには台湾にいた、という感じだろうか。気づけば、臭豆腐の独特な匂いも、黄色いタクシーも自分にとって当たり前のような存在になっていた。

そんな私が台湾と聞いて、一番に思い浮かぶこと。それは、何と言っても台湾人の優しさだ。私は小学生の時に台湾でそろばん塾や英語の塾などに通っていたが、それらは全て現地の子と一緒に通っていた。日本人である私を軽蔑する様子も全くなく、仲間として受け入れてくれた現地のコミュニティーが私は大好きだった。そんな現地のコミュニティーと私をつなげる架け橋となった一つが剣道である。

私は小学三年生の時に、小学校（日本人学校）の剣道クラブに入り、剣道を始めた。小学四年生の時に出場した初試合では、一回戦負けで悔しさのあまり泣いてしまった私のもとに、試合終了後に対戦相手だった台湾人が駆け寄り、「謝謝」と手を差し出してくれたのを覚えている。私にとってその子が剣道を通じて初めてできた現地の友達だった。その後も、幼少期に剣道を習っていた経験のある父が丁寧に指導を続けてくれたおかげか、私は徐々に上達し、回を重ねるごとに勝ち進めるようになった。成績が伸びていくと同時に、声をかけてくれる台湾人も増え、小学六年生の時には試合の時に応援しあえる友達やライバルという存在が周りにたくさんいた。試合で勝った時には、親よりも早く私の元へ飛んできて、ハイタッチをしてくれたり、負けた時には「次もあるから」と言ってお菓子を差し出してくれたり。振り返れば私は台湾人の優しさに支えられていた。

剣道を通じて私を支えてくれたコミュニティーは友達だけではない。地域の人も剣道を通じ、私を支えてくださった。休日の朝、父と公園で素振りをしていた時に、台湾人の高齢の方に日本語で声をかけられたことがある。私は小学校で、日本が台湾を統治していた時代のことについて学んだことがあったため、台湾人の中には日本語を話せる人がいることを知っていた。台湾は日本が日清戦争で清に勝利した結果、下関条約により植民地として統治されていた時代がある。その影響もあるのか、台湾には日本の文化などに興味を持っている台湾人が多くいた。実際に、台湾人の友達やその親などから、日本のアニメや漫画について聞かれるのも珍しくはなかった。台湾に日本のことを好きでいてくれる台湾人が多くいたから、きっと日本人である私をすぐに受け入れてくれたのだろう。私が中学生になるタイミングで日本に帰国することを台湾人の友達に知らせた時も皆、「いつでも戻ってきてね」と言ってくれた。

そんな台湾の人々の素敵な優しさに私は甘えていたのだろうか。台湾人の優しさが当たり前になっていた私は、日本に帰国後、初めて日本の学生になった。それまで日本の幼稚園や小学校に通ったこともなく、日本の学生経験がなかった私は中学校の入学式、楽しみな気持ちの反面、馴染めるかどうか少し不安だった。入学当初は、ちょっとした感覚の違いや価値観の違いに少々戸惑うことがあった。また、台湾にいた頃は深く受け止めることのなかった人間関係の複雑さに悩む日々が続いた。そんな時、いつも私の頭の中をよぎるのは台湾で過ごしていた日々や、台湾の友達だった。「離れていても、心はつながっている」、辛い時は自分にそう言い聞かせ、前を向いて生活していた。

今ではすっかり日本での生活に慣れ、中学校の最高学年として後輩をリードする存在になった。台湾の友達とは今でもネットを通じて、交流をしている。私の学校は中高一貫校で、高校に進学する時に海外から留学生が入学する。コロナ禍により世界中で安心して生活できない状況が続く中、留学生が入学した時に備えて、最近では中国ドラマを見ながら中国語の勉強をしている。また、日本に帰国してからできなくなっていた剣道を再度始めた。いつかあの時のライバル達と、また一緒に稽古や試合ができる日を楽しみに、日々練習に打ち込んでいる。

台湾を離れてから三年が経った今、台湾で得た発見や経験は今の私の強みになっている。台湾で過ごした十年間は私にとってかけがえのない宝物で、その十年間が今の私を形作ってくれた、と言っても過言ではない。こんなにも私を成長させてくれた台湾の人々にいつか日本の文化でもてなして恩返しをする、これは私が台湾を離れる時に誓ったことだ。いつか恩返しができる日まで、まずは私が日本という国を知り、剣道を始め日本の美しい文化に触れていきたいと思う。

優秀賞

素食との出会いと環境問題

南山大学 4年 野口 祈桜

台湾グルメと言えば、何を思い浮かべるだろうか。魯肉飯、牛肉麺、豆花、タピオカ。台湾のガイドブックに必ずと言っていいほど特集されている、これらのグルメが一番に挙げられるに違いない。しかし、私の場合は違う。私が一番に思い浮かべ、日本人にもぜひ知ってほしい台湾グルメ。それは、「素食」だ。台湾を訪れたことのある人ならば、素食という文字をどこかで見たことがあるかもしれない。夜市の看板やレストランのメニュー表など、実は頻繁に見かけるその2文字は、「ベジタリアン」、または「ベジタリアン食」を意味する。

私は大学3年の秋に大学を休学し、台北市内にあるゲストハウスでインターンとして働いていた。歴史的に有名な龍山寺のすぐそばに位置するゲストハウスで、付近には知る人ぞ知るローカルな3つの夜市（総称して艋舺夜市）や、80年以上の歴史を持つ新富町市場があった。また、若者が集う西門町まで地下鉄で一駅だったので、台湾のシェアサイクル「YouBike」に乗ってよく遊びに行ったものだ。私が素食と出会ったのは、まさにその頃だ。働いていたゲストハウスに、一人のシンガポール人の観光客が訪れた。彼は以前に日本で英語教師をしていた経験もあり、意気投合し一緒にご飯へ行くことになった。彼はベジタリアンだったので、私はその時初めてベジタリアンレストランで素食を食べることになったのだ。注文したのは、鰻やハンバーグ、カツが乗ったランチプレートに、刺身、唐揚げなど。もちろんすべてお肉や魚ではなく、植物性の材料から作られたものだ。素食という文字から、質素で地味な料理を想像するかもしれないが、一度口にしたらそのイメージは覆されることになるだろう。まさに私がそうであった。料理がテーブルに運ばれてきたとき、私はあまりの衝撃に自分の目を疑った。刺身は断面の模様やピカピカした見た目まで巧妙に再現されており、ハンバーグや唐揚げはまさに本物そのものの見た目だった。しかし驚いたのはこれだけではない。見掛け倒しではないかと半分疑いながら口に運んだ料理はどれも申し分ないほどクオリティが高く、食感や味も忠実に再現されていたのだ。それからの私はというと、様々な素食を食べてはその度に感激していた。

こうしてすっかり私を虜にした素食だが、これがなんと地球環境にとって良いらしいということを知ったのは、日本へ帰国してからしばらくたった頃だった。国連食糧農業機関（FAO）の2013年の報告によると、二酸化炭素などの世界の温室効果ガスの総排出量のうち、実は畜産業による排出量だけで14%を超えているという。この数字は、飛行機や自動車などの全ての交通機関が排出する量とほぼ等しい。これ以外にも、工業型畜産は森林伐採や水質汚染など様々な環境問題を引き起こす原因となっており、これまでのように肉中心の食生活を続けていくことは難しく、世界的に菜食中心の食生活にシフトしていこうという動きがあるのだという。

では、豊かな地球を未来に残していくために、私たちは美味しさを犠牲にしなければならないのだろうか。私はそうは思わない。根拠は、紛れもなく台湾で食べた素食だ。ハンバーグや唐揚げ、刺身などあらゆる動物性の料理は、植物性の食材を使って限りなく本物に近く再現することができる。そのうえ、「この料理はどんな食材を使って再現しているのだろう？」と、食べながら頭の中で想像を膨らませるのは思いのほか楽しい。「お肉の替わりにこんな食材を使ってハンバーグを作ってみようか」と、自分で新しいレシピをクリエイティブに考えてみるのもいいだろう。なにしろ初めからレシピに正解がないのだから。つまり、お肉の消費を減らすことは、決して食における選択肢が少なくなるのではない。むしろ、新たな味覚の扉を開けることだと私は考える。

話を少し変えて、台湾のシェアサイクル「Youbike」の話をしよう。移動する際に自動車やバイクではなく自転車を利用すると、その分温室効果ガスの排出量を減らすことができ、環境に優しい。しかし私が台湾でYoubikeを利用していたのは、単に「大好きな台北の街を眺めながら自転車を漕ぐのが楽しい」という理由からだ。それが結果的に、環境に優しい選択に繋がっていたというだけなのだ。食の面でも同様のことが言えるだろう。「環境問題」、「気候変動」と聞くと難しく感じるかもしれないが、明るくポジティブな気持ちで考えることができると私は思う。台湾で出会った素食は、私にこのことを気づかせてくれたのである。

covid-19がいつ終息するのかまだ見当もつかないが、また以前のように台湾へ行けるようになった時には、ぜひ一度素食料理を味わってみてほしいと思う。きっとそのクオリティの高さに、感動すること間違いないだろう。

優秀賞

寄り添う文化交流を台湾と

青山学院中等部 3年　座間 耀永

「関西弁と関東弁はどう違うんですか?」

コロナ禍で行われた台湾の学生との日本語オンライン交流会。予想外の質問に、私は面食らった。参加していた友達も慌てた。

「イントネーション、言葉も少し違うかな」

明確な答えを返せず、胸に何とも言えない気持ちが残った。それでも画面の向こうに座っている台湾の学生たちは、「うんうん」「なるほど」と楽しそうに納得してくれた。もっと具体的な例や、漫才でしゃべる関西弁も語れば良かった。自分の表現不足やとっさの対応への弱さを後悔した。

私は将来、様々な国に留学し、大使館で働きたいと考えている。その為、英語もさることながら、母国語である日本語を磨く努力もしている。気候や文化が言葉に影響することも勉強している。それ無くして世界に自国を紹介できないからだ。そんな折、作文の先生の紹介で、ある企業の新事業のサポートをやって欲しいと声がかかった。海外で日本語を学ぶ学生たちに、日本を日本語で紹介するという。その一回目の国が台湾だった。日本側は四人。台湾からは十名近くが参加する。お互いに好きな日本語を紹介する、ということがテーマになり、私は、「継続は力なり」を選んだ。漢字を大きく書いて画面ごしに説明したが、説明しているうちに「継続」が、いかに「力」になるのかを上手く表現できないことに気づいた。普段当たり前に使っている言葉を説明することが、想像以上に難しい! 友達は「努力」「誠実」を選んでおり、私も通じやすい漢字を選べば良かったと反省。相手への配慮が足りなかったことを悔いた。相手が何を知りたいか、どうやったら伝わるかをもっと考えるべきだった。「相手の気持ちに寄り添う」ことが必要だと思った瞬間でもあった。人数も多かったせいか、お互いの紹介であっという間に時間が経ってしまった。私には反省しか残らなかったが、台湾の学校から「楽しかったからもう一度同じメンバーでやりたい」と連絡が入ったと聞き、リベンジをしよう!と準備を始めた。考えてみれば、私は友達から、「主食はタピオカ?」と聞かれるほどの無類のタピオカ好き。閉店したお店も行き尽くし、近所の店舗は全制覇。出先でも立ち寄り、自作もするし、ちょっとしたタピオカマニアを自負している。「昨年、台湾に旅行に行く予定だったこと、タピオカ好きのことを自己紹介に入れよう」台湾の文化と歴史と日本との関係も調べ直した。前回用意しなかったプレゼン資料を台湾語併記で用意した。日本の四季の美しさや食文化など、楽しめそうな視点を重視。オンラインで聞きとりやすい、活舌の良い文言を選択した。

二回目の交流は、前回よりスムーズに進んだ。お互いを理解しようとみんなの気持ちが「寄り添って」いた。私は、次回に向けてしっかりとした手応えを感じた。

折しも、五月十一日の新聞が私の心をもっと動かした。台湾の四歳児の命を日本が救ったというニュースだった。日本でしかできない悪性腫瘍の手術。コロナ禍で渡航が制限されている中、特例でビザを発行するという緊急対応が功を奏した。これぞ、「寄り添う文化交流だ」と思った。私は昨年、コロナ禍に大きな手術をしなければならなかった。大量出血が想定され、自分の血を再輸血する事前の採血や、度重なる検査、入院前の説明や手続き、主治医のみならず麻酔医の同意書、失敗した場合のリスクの説明に気が遠くなり、手術を受けることがどれだけ大変か身をもって知っている。本当に自分が良くなるのかという恐怖。日本語が通じる自分でさえ不安だったのに、言葉が通じない四歳児とご家族はどんな思いだったのだろう。記事から、支援する方々や医療現場のスタッフが寄り添ったことが読み取れた。最近では、コロナ患者が急増している台湾に、日本から余ったワクチンを輸出する動きも出ているとニュースで知った。この感染症には世界が協力しなければならない。台湾のひっ迫した状況に鑑み、ワクチン支援をするのは正しい考え方だと思う。これも、互いに寄り添う協力関係だ。

お互いを理解しようと思うこと。寄り添うこと。それが文化交流の始まりだと思う。かつて海外に行った時、言葉が通じなくて困ったことが多々あった。英語ができるようになってきた今でも、言葉に壁があるのは痛感している。しかし、相手に理解してもらおうというあきらめない努力で、相手が理解してくれた経験も多くしている。ここでも寄り添うことの大切さを経験している。どんな障壁があっても「寄り添う」ことで越えられる。これから私が世界に出ていくとき、私は人に寄り添っていく。そして、寄り添ってもらう努力もしていく。

そして、次回の台湾交流会が待ちきれない。

大賞

築起日本和台灣的橋樑

佐賀大学 3年 山内 佳祐

從出生到中學畢業，我在台灣生活了15年。這段期間裡，我一直就讀台中日本人學校，也因此生活裡融合了日本文化與台灣文化。

在學校中使用日語，平常生活則會使用到華語。假日時，我最期待陪母親去有賣許多熟食的傳統市場。我也喜歡台灣熱鬧的夜市，那裡有各種好吃的美食和好玩的攤販。偶爾也會看看我最喜歡日本動漫，感受日本最新的流行文化。

夏天時，日本人學校會在校內舉辦大型的慶典並邀請台灣人參加、冬天則會舉辦跟日本一樣的校內馬拉松大會，藉由這些活動，讓我們感受和日本國內一樣的季節變化。有時和台灣朋友交流時，他們會驚訝地說：「你們體育課好嚴格喔」、「日本人學校活動好多好羨慕喔」，但他們不會投以奇怪的眼光，而是用理解日本文化的態度來看待這些差別。生活中我隨時可感受到台灣人很喜歡日本文化，因為來自日本的連鎖餐飲店都會大受歡迎。

我曾經有個特殊經驗：當時台中市開了第一家日本迴轉壽司「壽司郎」，我和父母親一起去，卻因為太多人，我們竟排隊等了3個小時以上，午餐變成了晚餐，讓我難以忘記。

日台之間，不光是喜歡的情緒，彼此間還有緊密的關係。我父親常說：「兩國間緊密關係是從日治時代開始，因為日本提供了許多新的文化跟技術幫助台灣發展，並且保護台灣特有的文化」，雖然當時我年紀小，但聽了之後還是很感動。當日本發生東日本大地震時，台灣馬上捐出200億圓幫助日本，日本也會在台灣遇到困難時伸出援手。這些都讓人感受到兩國間深刻的歷史關聯，還有日台人民之間的友誼。

現在回想起來，我的生活中不論是日本文化還是台灣文化，兩者缺一不可。我出生於台灣，在擁有如此特殊經驗的環境中長大，這不僅要感謝用心照顧我的父母親，還要感謝遠從日本來到人生地不熟的台灣的老師們、從日治時代時就對日本很友善的台灣祖先，以及現今所有喜歡日本的台灣人。我要懷著這份感謝之意築起日本和台灣的橋樑，並期許自己成為更好的人才，為日台友好盡一份心力。

日本と台湾の架け橋として

私は生まれてからの15年間を台湾で過ごしましたが、義務教育を台中市の日本人学校で受けました。ですので、日本文化も台湾文化も全て私の一部です。

学校生活では日本語を使い、日常生活では中国語を使っていました。休日には、母と一緒にお惣菜が沢山並んだ台湾の伝統的な市場に出かけたり、美味しい食べ物や楽しい出店がある賑やかな夜市に出かけたりするのが楽しみでした。時には大好きな日本のアニメを見て日本の文化を楽しみました。

夏には学校の校内のグラウンドに台湾人も招いて大規模な夏祭りをしたり、冬には日本と同じマラソン大会があったりして、日本の季節を感じられる行事もありました。学校の交流会や習い事で出来た台湾の友達から話を聞くと、「日本の体育の授業はきつそうだね」や「行事が沢山あって羨ましい」などと驚かれます。しかしそれを決して変な目で見ず、文化を許容してくれ、理解しようとしてくれます。台湾人は日本が大好きです。日本の飲食店のチェーン店が台湾にできると皆大喜びします。

実際にこんなエピソードもありました。台中市に初めて日本の回転寿司の「スシロー」が来た時の話です。両親と一緒に昼食をとるつもりでしたが、人気すぎるが故に、なんと3時間以上も並び、昼食が夕食になってしまったのです。この日のことは決して忘れられません。

大好きであることもさることながら、そこには深い絆もあると感じていました。父から幼い頃より、「日本が台湾を統治していた時は、台湾の文化を守りながら色んな新しい文化や技術を教えて台湾を成長させたから台湾もそれに感謝しているんだよ。だから仲良しなんだ」と両国の緊密な関係について語ってくれていました。私は幼いながら感動したことを覚えています。日本の東日本大震災時に200億円もの多額な寄付を行ったのは記憶に新しいかと存じます。そして日本もまた幾度も台湾に手を差し伸べております。そこには、両国間の深い歴史が感じられ、私は、台湾人からは単なる〝好き〟だけではなく、情が厚く、国境を超えて〝人を思う気持ち〟を、人生を通して学んでいます。

振り返ってみると、私の生活はどちらかの文化が欠けていてもあり得ない生活でした。私は台湾に生まれ、このような特別な経験を恵まれた環境の中で出来ました。それは、広い心を持って大事に育ててくれた両親だけでなく、日本から遥々慣れない土地に引っ越して来られる学校の恩師ら、統治時代から日本に好意を持って下さった台湾の祖先、そして、今日本を好きでいてくれる台湾人すべての人のおかげだと思っています。この感謝の気持ちを持って日台の架け橋となり、大好きな台湾も日本もよりよくしていけるような人材になります。

優秀賞

新冠肺炎疫情中重新發現台灣的魅力

大阪大学 4年　谷 俊作

「哈台族」的我，上大學之後每年都造訪台灣。很多日本朋友好奇地問我：「你怎麼這麼喜歡台灣？」我每次都找不到合適的答案，因為對我來說，台灣的魅力實在是太多了，像是雖然很臭但是很好吃的臭豆腐、從台鐵上看到的福爾摩沙美景，還有濃濃古早味的老街等，如果要我只能選一個答案，我還真選不出來。不能去台灣的這一年，最讓我想念的，是台灣朋友，是台灣濃濃的人情味。但因為某件事情，讓我覺得在這一年裡，儘管不能去台灣，我和台灣的距離反而更近了。

不能自由跨境移動的這一年，我和台灣朋友苦思對策，最後決定在線上舉行交流會。我們每個月找出當月相關的主題來互相交流、討論。比如說，去年八月我們給台灣朋友介紹了日本人「お盆」(盂蘭盆節)怎麼過，我才知道原來在台灣也有祭拜祖先的「清明節」。九月台灣朋友給我們介紹了「中秋節」的活動，我才知道原來家家戶戶會一邊烤肉一邊賞月，這樣的「全民運動」讓我非常驚訝。

透過這樣的交流，互相介紹台日文化，促進彼此了解對方的生活，以及雙方習俗上相同與相異之處。雖然只是線上交流，但是我感覺，與台灣朋友更接近了。有一次台灣朋友跟我說：「期待你能早日來台灣，到時候我們一起去吃豆花吧！」聽到這麼溫暖的話，我感到非常開心。

此外，我還有另一個新發現。原來，所謂交流並不僅是面對面溝通、接觸。即使在沒有辦法面對面交流的現在，只要有著想更理解台灣或日本的積極態度，就能夠透過其他的方法，拉近彼此的距離。在疫情之下，為了台日交流的發展，我們必須思考我們能做什麼，不管在台灣或日本，一定會有能夠促進彼此溝通、交流和理解的方法。

正因為透過這一年的線上交流，我終於找到了日本朋友在本文開頭提問的答案，我之所以這麼喜愛台灣，是因為我有非常溫暖的台灣朋友。我衷心希望，能夠儘早去台灣和他們見面，再次重溫台灣濃濃的人情味。與此同時，為了成為台日友好的橋樑，為台日友好積極貢獻，我會更加努力學習中文、台語和魅力無窮的台灣文化。

コロナ禍で再発見した台湾の魅力

台湾が大好きな私は大学入学後、毎年絶えず台湾を訪れてきました。そして多くの日本の友人は興味津々にこう私に聞くのです。「どうしてそこまで台湾が好きなの？」私はその質問をされるたびに答えに困ってしまいます。なぜなら私にとって、台湾の魅力はあまりにも多すぎるからです。匂いがきついけどとても美味しい臭豆腐、台湾鉄道から見る「麗しの島」の絶景、そしてレトロな雰囲気の下町など、本当に一つの魅力を選びきれないのです。台湾に渡航できないこの一年、友人、そして人情味溢れる台湾を最も恋しく思いました。しかし一方で、あることがきっかけに、台湾には行けませんでしたが、この一年で台湾と私の距離はさらに近づいたと感じています。

この一年、私は台湾の友人たちとオンライン上で交流を行うことにしました。毎月、その月にまつわるテーマで交流、議論を行いました。例えば、去年の8月には私たちが日本の「お盆」の過ごし方について紹介をしました。その時に初めて、台湾にも先祖を供養する「清明節」があることを知りました。そして9月には台湾の友人たちが「中秋節」にどのようなことをするのか教えてくれました。驚いたことに、台湾では「中秋節」になると毎年、多くの家で焼肉をしながら月見をするそうです。このような「全民運動」に私はとても驚きました。交流を通して、互いの文化についての理解を促進することができました。オンライン上ではありましたが、より一層、台湾の友人との距離が近づいたように私は感じました。ある時には台湾の友人が、「早く台湾に来て、一緒に豆花を食べに行くのを楽しみにしているよ！」と言ってくれ、その温かい友人の言葉にとても嬉しい気持ちになりました。

さらに、もう一つ新たな発見がありました。それは「交流」はただ単に直接会って対話するだけではないということです。たとえ直に会うことができなくても、日本や台湾についてもっと理解したいという思いさえあれば、お互いの心の距離を縮めることができると思います。コロナ禍において、私たちは日台交流のさらなる発展のために、今できることを考えなければなりません。

この一年、台湾の友人とのオンライン交流を通して、私は冒頭の日本の友人の質問に対して、今なら自信を持って答えることができます。とても優しい台湾の友人たちの存在こそが私が台湾を愛してやまない最大の理由です。早くまた台湾を訪れ、友人に再会し、関係を深められることを楽しみにしつつ、日本と台湾の架け橋となり、積極的に日台友好に貢献できる人になれるよう、これからも精一杯、中国語、台湾語そして魅力いっぱいの台湾の文化についての勉強を頑張ります。ありがとうございました。

優秀賞

返回1／2的家

関西学院千里国際高等学校 2年 田村 夏琳

記得在台灣唸小學的時候，同學時常問我：「夏琳，妳是日本人嗎？」「不是。」「那妳是台灣人？」「也不是。」當時的我曾回答：「我是日本人，同時也是個台灣人。」

我出生於日本，但因父親工作上的關係，在我兩歲的時候舉家搬來台灣住。擁有台灣人父親及日本人母親的我，從小就有同時接觸到雙方語言的環境。住在台灣時，我就讀了當地的普通國民小學。回到家裡，我則會與媽媽使用日文溝通。不只要會中文，我也要求自己學會日文，可能是對身為半個日本人的自己，卻沒辦法寫日文感到矛盾和羞恥吧。為了同時維持兩種語言水準，我費了不少功夫。而這番努力，如今讓我能像普通日本人一樣，像普通台灣人一樣，說寫流利的文章。這個努力，有派的上用場喔！小學四年級，我以臨時演員的身分在台灣參加了一個以日本為主題的好萊塢電影。還有在國一的時候，我以日文演講歡迎我們學校的日本姐妹校。而現在，我正在與台灣的高中生們準備一個國際交流演講比賽。能夠同時為我的兩個國家活動，我感到很驕傲！

不過除了這些「學習」生活，最令我難以忘懷，銘記在心的台灣回憶是那些用五感感受到的味道、感觸、景象和聲音。例如在夏天傍晚中的散步，是我最愛的一刻。我遛著狗，一邊與媽媽分享當天所發生的點點滴滴，一邊用全身去感受那帶有中午炎暑熱氣的暖風吹拂，還聽得到小朋友玩樂的笑聲。雖然我現在住在日本，但我還是常常想起與家人曾經漫步過的那一條步道。我也常想起攤販小吃撲鼻而來令人垂涎三尺的香味，我非常喜歡父親經常買回來的小吃。還有每晚9點多傳來垃圾車的音樂、窗外有色彩繽紛的霓虹招牌在城市各個角落閃爍等，彷彿大家都在說：「台灣還醒著喔！」。在我心中，台灣永遠是個溫暖又開朗，富有人情味的福摩沙。

我認為在台灣感受到的一切造就了現在的我。台灣美麗的自然景觀使我的心胸更加寬闊。與同學和老師一起談心說笑，讓我更了解台灣的文化。而中文和日文，就像是與我一同度過生涯的朋友一般。許多關於台灣的美好回憶，一幕一幕都留在我心裡。我現在在日本讀書，是因為我認為身為半個日本人半個台灣人的我，必須在長大成人之前接受兩國語言、文化和歷史的教育。以我這16年的人生看來，自己的未來必定會有許多甘苦之事，以及需要歷經的事情。因為當一個維持兩國和平關係的橋樑並不是容易的事，但我並不膽怯，因為任何時候我都有可以回去的那1／2的家：台灣與日本。

帰るべき1／2の家

台湾の小学校に通っていた頃、友達はよく「ねえ、かりんって日本人なの？」と聞いてきました。「うん」「じゃあ台湾人か」「ちがう」あの頃の私は「日本人だし、台湾人だよ」と答えました。

私は日本で生まれましたが、父の仕事の都合上、私が2歳のときに家族で台湾に引っ越して来ました。台湾人の父と日本人の母を持つ私は、両方の言語が常に飛び交う家庭環境の中育ちました。台湾に住んでいるとき、私は現地の普通の学校に通い、家に帰れば母と日本語で会話していました。「中国語だけでなく、日本語もできないと」と、いつも自分に言い聞かせながらひらがなや漢字の勉強をしていましたが、本当は内心とても焦っていたのかもしれません。自分は半分日本人であるのにも関わらず、日本語ができないのはおかしい、恥ずかしいことだと。結論から言うと、二つの言語を保つのは決して楽ではありませんでしたし、努力が必要でした。しかしこの努力のおかげで、普通の台湾人のように、普通の日本人のように読み書きができるようになったのです。しかも、ただの努力では終わらなかったのですよ！小学校四年生の時、私は台湾で撮影されたとある日本を舞台としたハリウッド映画のエキストラとして参加することができたのです。さらに中学一年生の時、私は通っていた中学校の姉妹校である日本の学校との交流を行った際、日本語でスピーチをして歓迎しました。そして、今の私は台湾の学生たちと共に国際プレゼンテーション大会の出場に向けて準備をしています。このように両国のために活動している自分をとても誇りに思います！

こういった学び的な日常を除

き、私の中にある台湾の思い出の大半は、私が五感を通して感じたものです。それは何かの味や匂いだったり、感触だったり、景観だったり、音であったりします。例えば、夏の夕暮れ時の散歩は私が最も好きなひと時です。犬の散歩をしながら、母とその日にあったことなどを語り合い、昼間の生ぬるさをもった温かく湿った風を全身で感じながら歩きます。子供達のはしゃぎ声も聞こえてきます。私はその日々のことを今でも鮮明に覚えていて、度々かつて家族と歩いたあのゆったりとした散歩道を懐かしく思います。匂いでの記憶もあり、屋台の食べ物屋さんの前を通りかかったら漂ってくる美味しそうな匂いを思い返す時が多々あります。屋台のご飯はよく父が買ってきてくれたので、大好きです。さらに、夜9時になると街に響き渡るゴミ収集車の音楽や、窓の外を見渡すとあたり一面に広がるカラフルな看板の光などは、まるで台湾の人々が「まだ起きてるよ!」と言っているようです。私の中の台湾はいつも明るくて、温かい、美しい島国ーフォルモサであります。

私は台湾で心から感じた全てのことが、今の私を作っているのだと思います。台湾の美しい自然景観は私の心全体を豊かにし、友達や先生とのおしゃべりは私にとって台湾の文化をより深く理解するためのツールでありました。そして中国語と日本語は、私と人生を共に歩み続けるライフパートナーであり、大切な友達です。台湾に関する思い出は、全て一つ一つ私の心の奥底に残っています。私が今日本で勉強しているのは、半分日本人であり半分台湾人でもある人間として、成人する前に自分の国である両方の国家の教育を通じてそれぞれの言語、文化、歴史を学んでおく必要があると考えたからです。16年間生きてきて、私の人生はきっと山あり谷あり、うまくいく時もあれば困難にぶつかるときもあると思っています。それは、両国の架け橋として友好関係を築き続けることはとても誰もができることではないからです。でも怖くはありません。なぜなら、私にはいつでも帰るべき1／2の家ー台湾と日本があるのですから。

優秀賞

日本與台灣的發酵食品研究

元培医事科技大学 大学院 1年 河野 共喜

當我2017年第一次來台灣的時候，台灣最具代表性的發酵食品臭豆腐跟皮蛋讓我非常震撼。一般來說日本人對臭豆腐的印象普遍不太好，但對我來說卻是一個難忘的美食。不僅聞起來很香，跟台式泡菜一起吃的話更美味。因為臭豆腐跟皮蛋同樣都是發酵食品，所以我對台灣的發酵食品很感興趣。

在日本的大學，我念的是發酵食品系，學習日本傳統的醬油、味噌的發酵方法和微生物等。大學四年級的時候，我以交換學生的身份來到元培醫事科技大學為期一個月。學到了許多關於台灣特有食品的知識，並與老師跟同學一起去參觀食品工廠。台灣社會大眾對發酵食品的了解不深，但其實紅茶、烏龍茶、臭豆腐等發酵食品在生活中隨處可見。我想對日本及台灣的發酵文化進行更深入的研究，因此決定來到台灣就讀食品科學系研究所。

因疫情關係，我等到2020年10月才入境台灣，經過隔離生活後，開始了我的研究生活。但是，我聽不懂很多食品衛生和化學藥品等的專業詞彙，每天都很拚命學習。這段期間多虧了研究所的同學及老師用英文提供協助，生活上也幫了我許多忙。

台灣人的親切和體貼感動了我，讓我能以更堅定的意志繼續研究挑戰。我的研究題目是「發現豆渣作為食品的價值」。我與台中一家工廠進行產學合作的聯合研究，透過豆渣發酵來提高其營養價值，目的是希望找出其利用方法。也希望能藉由本研究讓豆渣在台灣的食品業界更加普及，為台灣食品產業吹起一股新的風潮。我希望自己能夠作為日本與台灣之間友好關係的橋樑，向更多人傳達台灣的美食。

日本と台湾の発酵食品を研究する

台湾に初めて来た2017年のときに強いインパクトを受けたのが代表的な発酵食品である臭豆腐とピータンである。日本人が臭豆腐に対して抱く印象は決して良い評価ではないが、私にとっては思い出に強く残る美食であった。においは臭いが、台湾式のキムチと食べると味は美味しい。臭豆腐とピータンの共通点は発酵していることであるため、台湾の発酵食品に魅了された。

日本の大学では発酵食品学を専攻し、日本の伝統的な味噌や醤油など発酵製法や微生物などについて学んだ。大学4年生のときに1ヶ月間、元培医事科技大学へ交換留学した。そこで台湾独自の食品を学び、先生や友人とともに食品工場へ見学に行った。台湾では発酵そのものは意識されないが、紅茶、烏龍茶、臭豆腐などが身近に多く存在している。私は、日本と台湾の発酵文化についてさらに研究したいと考え、台湾への食品科学学科への大学院進学を決意した。

コロナ禍であるため2020年10月に遅れて台湾へ入国し、検疫生活を経て、研究生活がスタートした。しかし、食品衛生や化学薬品など専門的なことばの数多くは分からず、日々必死になって学んでいる。その際、同じ研究生や先生が英語などでのサポート、生活面では多面的に援助してくれた。台湾ならではの優しさや思いやりが、私の心を感動させ、さらに強い志を持って研究に挑みたいと思った。研究テーマは「おからを食品用としての価値を見出す」である。台中にある工場と産学連携となり共同研究し、おからを発酵させて栄養価値を高め、利用方法を探索することが目的である。そこで、本研究を通じて、おからが台湾の食品産業でより多く流通することを願いつつ、食品業界に新しい風を引き起こしたい。日本と台湾の友好関係も発光させて、台湾美食を多くの人に伝えていきたい。

優秀賞

興趣是最好的老師

青山学院大学 4年　南 愛莉

「所以從那個時候開始，我的眼裡就看不到其他女生。」這是我最先記住的中文台詞，是我最喜歡的台灣演員炎亞綸在電視劇裡說的。但是今天，我不是來這裡表達我對他的喜愛之意的，而是來分享透過學習中文得到的領悟。

我在大學主修英語，第二外語是中文。大二時，我認為看中文電視劇可能會對我的中文學習有所幫助，便開始看台灣電視劇。我看的第一部電視劇是由炎亞綸主演，我對他一見鍾情，因為我覺得他講的中文很好聽，期許自己講的中文也能像他講的一樣流利，並且希望有一天可以見到炎亞綸，用中文跟他聊天。這成了我學習中文的動力。從那個時候開始，除了大學的中文課之外，我每天都看台灣電視劇，然後把喜歡的台詞抄在筆記本上。每當我記住一句台詞，我就感覺離炎亞綸好像更近了一步。

不久後，我便萌生了去台灣留學的念頭。大三時我參加了台灣國立政治大學交換留學的考試。面試的時候，面試官用中文問我：「南愛莉同學，妳的缺點是什麼？」這是我第一次參加中文的面試，因為過於緊張，所以腦子裡一片空白。幸好當時我突然想起了我抄的中文台詞。於是我就照著腦海中浮現出來的台詞回答說：「我容易相信別人，沒有判斷力。」最後，我通過了面試，取得了去政治大學留學的資格。只可惜，由於新冠肺炎疫情的影響，我沒能去成。

在學習中文的過程中，我了解了一件很重要的事：興趣是最好的老師。遇到了喜歡的事情，大家都會拚命努力，自然而然地就能夠進步。剛上大學的時候，我連用中文數一二三都不會，兩年後卻能通過中文的台灣留學面試，然後現在能夠在這麼多人面前用中文進行演講。

透過學習中文，我意識到熱衷於自己喜歡的事情的重要性。我非常感謝台灣和炎亞綸讓我了解了這件事。現在，我的目標是考上台灣的研究所，今後我也會一邊享受學習中文的過程，一邊努力精進讓自己的中文能力。

好きこそものの上手なれ

「その時から、僕の目に他の女性は映らなかったんだ」これは私が一番最初に覚えた中国語のセリフで、私の一番大好きな台湾の俳優アーロン・ヤンさんがドラマの中で言った言葉です。しかし、今日私は彼への愛を伝えに来たのではありません、中国語学習を通して考えたことを話しに来ました。

私の大学での専攻は英語で、中国語は第二外国語です。大学2年生の時、もしかしたら中国語の勉強に役立つかもしれないと思い台湾ドラマを見始めました。その時一番初めに見たドラマで主演を務めていたのがアーロンさんでした。一目惚れしました。彼が話す中国語はとても聴き心地よく、私もこのように綺麗な中国語を話せるようになりたいと思ったのです。さらに、いつか彼にお会いして中国語で会話できたらと思うようになり、それはいつの間にか私の中国語学習の大きなモチベーションになっていました。そこから、大学の中国語の授業に加え、毎日台湾のドラマを見て、気に入ったセリフをノートに書き留め暗記していきました。セリフを一つ覚えるたび、なんだかアーロンさんに一歩ずつ近づいている気がしたのです。

その後台湾に留学したいという気持ちが芽生え、大学3年生の時に台湾国立政治大学の交換留学の試験を受けることにしました。面接の際、面接官の方に中国語で「南さん、あなたの短所は何ですか？」と質問されました。私にとって初めての中国語面接だったので、緊張で頭が真っ白になってしまいました。しかしその時、私の中国語セリフノートに書き留めてあった一つのセリフが突然頭に浮かんできて、思い切ってそれをそのまま口に出しました。「私は人を信じやすく、判断力に欠けます」結果は合格で、政治大学への交換留学が決まりました。しかし新型コロナウイルスの影響で、残念ながら留学は中止になってしまいました。

しかしこれまでの中国語学習の道のりは、私に大切なことを教えてくれました。『好きこそものの上手なれ』です。誰でも好きでやっていることは一生懸命になれる、ゆえに自然に上達できるのです。大学に入学した時、中国語で数すら数えられなかった私が、2年後に台湾留学の中国語面接に合格し、そして今、こんなに大勢の人の前に立ち中国語でスピーチをしています。

中国語学習を通して、好きなことに打ち込む大切さを学びました。このことに気付かせてくれた台湾、そしてアーロンさんにとても感謝しています。今の私の目標は、台湾の大学院に合格することです。これからも中国語学習を楽しみながら、更なる成長を目指し努力を重ねていきます。ご静聴ありがとうございました。

優秀賞

我們日本能向台灣學習的事情

東京中華学校高等部 2年　廣松 佳依

日本和台灣，是兩個很親密的國家。許多日本人都喜歡台灣，許多台灣人也喜歡日本，所以在兩國都能看到許多對方的觀光客。我曾經去台灣玩，有些台灣人聽到我會說中文時，會告訴我一些他們對日本的好印象，有時還會幫我打折。在台灣，台灣人都會用歡迎的態度，親切地對待我們。因此，雖然我們家跟台灣沒有任何淵源，但對我來說台灣就像是我的第二個故鄉。

當然，每個國家都有他們的優缺點，但我覺得台灣有許多日本沒有的魅力。第一，從去年開始，全世界都大規模的流行新冠肺炎，很多國家都有許多限制的措施，我們有很多事情受到限制。但在台灣，因為疫情控制良好，許多事情是被允許的，例如：演唱會或跨年等活動。去年一整年，日本因為疫情尚在蔓延，許多活動都被取消了。所以我覺得我們可以向台灣學習，他們發現疫情時又快又準確的應對態度。第二，在世界越來越多元化的今天，我們必須要創造一個任何人都能舒適生活的社會。在台灣，有十六族原住民，他們都能使用自己的原住民姓名，並保留他們的傳統文化。台灣已在2019年承認同性婚姻，是亞洲第一個承認同性婚姻的國家。我覺得台灣是個尊重個別發展的國家，對所有人都很寬容。但在日本，政府還沒承認同性婚姻，甚至夫婦必須使用相同姓氏，我們注重所有人的一致性，卻也壓抑了每個人的自我特性。有許多日本人只會說日文，也還有一些人有對同性戀及外國人有著不平等的看法，所以我希望日本也可以像台灣一樣承認同性婚姻，並從小加強英文教育，成為一個更國際化、更多樣化的國家。

我從小一開始就讀東京中華學校，台灣對我來說是培養我成長不可或缺的國家之一。為了更進一步了解台灣的各種文化及人事物，我計畫去台灣念大學。也想要透過日台青少年演講比賽，認識許多台灣的青少年朋友，並更深入了解台灣的文化。將來希望能使用中日英這三種語言，來做日本與台灣的橋樑，並使用我學到的知識來傳達日本和台灣的魅力。

日本が台湾から学べること

日本と台湾はとても親密な関係を持つ二国です。多くの日本人は台湾が好きで、また多くの台湾人も日本が好きです。なので、二国間ではお互いの国の観光客を多く見かけます。私が以前台湾に遊びに行った際、私が中国語を喋れることを知った一部の台湾の方々は、私に彼らのもつ日本への好印象を教えてくれたり、またあるときにはおまけをしてくれたこともありました。このように、台湾では多くの方々が私達日本人を温かく迎え入れてくれます。なので、私の家族は全く台湾とは繋がりがないのですが、私にとって台湾は第二の故郷です。

どの国にもそれぞれ良い点もあれば、悪い点もありますが、私は台湾には日本にはない多くの優れた点があると思います。1つ目は、去年から世界中では新型コロナウイルスの大規模な蔓延に伴い、多くの国々で様々な制限をもたらされた措置が行われていて、私達は多くのことを制限されてしまってます。ですが、台湾ではウイルスの抑え込みに成功し、多くのことを行うのが許されています。例えば、ライブや年越しのイベントなどです。しかし、日本はウイルスの流行がまだ続いているため、去年一年は多くのイベントが中止となってしまいました。なので、私は日本は台湾のウイルスを発見した際の速く、そして的確な対応を学べると思います。2つ目は、世界がどんどん多様化している今、私達はすべての人が快適に過ごせる社会を作らなければなりません。台湾では、16の民族がいて、彼らは自分の原住民氏名を使用したりと、彼らの伝統文化を守っています。更に台湾は2019年、アジアで一番最初に同性婚を認めました。このように台湾は個々の発展を尊重し、すべての人に寛容です。それに対し、日本はまだ同性婚を承認しておらず、更には夫婦で同姓でなければならなかったりと、全員の一貫性を重視していて、個々の特色を抑え込んでしまっています。また、一部の人は同性での恋愛や外国人に対し不公平な見方を持っていたりします。なので、私は日本も台湾のように同性婚を認め、多様化した国になってほしいです。さらに、まだ多くの日本人が日本語しか喋れないので、幼い頃からの英語学習を強化し、もっと国際化した国にもなってほしいです。

私は小学校から東京中華学校に在籍していて、台湾は私にとって成長させてくれた不可欠な国の一つです。なので、私はより深く台湾の様々な文化や事柄などを学ぶために、台湾の大学に進学することを計画しています。そして、この日台文化交流 青少年スカラシップスピーチコンテストを通して、多くの台湾の方たちと知り合い、さらに深く台湾の文化を理解したいです。将来は、今まで学んできた日本語・中国語・英語の三ケ国語を活用して、日本と台湾の架け橋になり、私が学んだ知識を生かして、日本と台湾の魅力を伝えていきたいです。

Message

広報アンバサダー
速水もこみちさん

©JIN AKAISHI

広報アンバサダー 速水もこみちさんからのメッセージ

第18回日台文化交流 青少年スカラシップ2021の広報アンバサダー速水もこみちさんから受賞者の皆さまへメッセージをいただきました。

「第18回 日台文化交流 青少年スカラシップ2021」受賞の皆さん、おめでとうございます。

皆さんの作文やスピーチなどを読ませていただきました。台湾に対する熱い想いや心打たれる作品ばかりで、非常に感動しました。そんな皆さんのあたたかさが、台湾と日本を繋げてくれているような気がしました。

僕自身も、そんな皆さんから非常に刺激を受けましたので、さらに盛り上げていけるように努力していきます。また皆さんと一緒に盛り上げていきたいと思っております。

OBOGからの激励メッセージ

今回の受賞者へ、過去の「日台スカラシップ」を受賞したOBOGから激励のメッセージが多数届きました。一部を抜粋して紹介します。

第14回受賞者 藤田 健司

皆さん、このたびは受賞おめでとうございます。

新型コロナウイルスの影響により、研修旅行が実施されなかったのはとても残念ですが、この受賞が皆さんの何かのきっかけになればいいなと思います。

私自身は今、映画を作ることになったので脚本の勉強中です。台湾とは直接関係ありませんが、研修旅行で初めて外国へ行き、自分の世界がいかに狭いか思い知ったことが、今に繋がっている気がしています。

機会を活かすかは自分次第ですので、ぜひこの受賞を糧に、さらに何か挑戦してみてください。私も頑張ります！

台湾研修旅行へ一緒に行った仲間と再会して撮った写真です。
藤田は左から２番目

第16回受賞者 岸 ふみ

受賞された皆様、おめでとうございます。突然ですが私は今、規格外野菜からコスメを作っています。台湾とは無関係に見えますが、活動の支えは間違いなく2年前の台湾での学びです。日本語世代の方との交流や行政訪問の中で感じた「世界が平和にならない理由」を胸に、社会問題に向き合っています。

かけがえのない仲間との出会いや次に繋がるヒントを得る場がここにはあります。この受賞を一歩目に、ぜひ大きく躍進して下さい。

いつか皆さんとお会いする日を心待ちにしています！

2020年夏 開催したオンラインイベント終了後の写真。
真ん中が岸ふみです

※メッセージは2021年8月時点でお送りいただいたものです。

第18回 日台文化交流 青少年スカラシップ2021

オンライン交流会

新型コロナウイルスによる影響で表彰式と台湾研修旅行が実施できないため、8月18日、本コンテストの大賞・優秀賞の受賞者および過去の受賞者OBOGをご招待し、オンラインで交流会を実施しました。

謝代表、渡辺審査委員長、そして今回アンバサダーに就任しました速水もこみちさんより、受賞のお祝いメッセージを頂きました。

また、産経新聞の台北支局長も務めた河崎記者による台湾ミニ講座を実施。台湾のお菓子を食べながら、和気あいあいと交流を深めました。

広報アンバサダーの速水もこみちさんから受賞作品の感想をいただきました

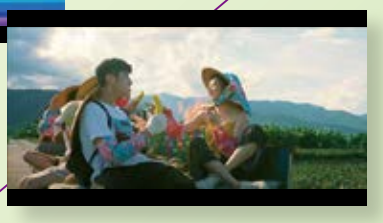
台北駐日経済文化代表処の謝長廷代表からお祝いのビデオメッセージをいただきました

交流会で食べた台湾のお菓子

ミニパイナップルカスタード

郭元益（グォ・ユェン・イー）

台湾にはいろいろなタイプのパイナップルケーキがありますが、味、食感はつくり手によってさまざま。中でも郭元益のケーキはパイナップルの果肉感が強く、台湾で塩漬けされたアヒルのたまごを使用したカスタード風味の餡を、27層にもなる生地で包み込んだ一品。



交流会で紹介された台湾の観光PR動画

少しでも台湾の雰囲気を共有できればと、台湾の観光PR動画を紹介

ON LINE

宣伝・PR、メディア掲載報告

今回実施された宣伝PR活動およびメディア掲載事例の抜粋を紹介します。

SankeiBiz　2021年1月29日付

日台文化交流　青少年スカラシップ

作文・スピーチ部門で作品募集

産経新聞社とフジサンケイビジネスアイは、日台の交流促進と日台友好に貢献する人材の育成を目的とした「第18回日台文化交流　青少年スカラシップ」を実施します。作文とスピーチの2部門で作品を募集。審査委員長の渡辺利夫・オイスカ会長らが作品の選考にあたります。

「台湾に関すること」をテーマに、作文部門（言語・日本語）は2千字以内、スピーチ部門（言語・中国語、台湾語）は3分相当の論文で応募ください。スピーチ部門は、論文審査通過者を対象にスピーチと質疑応答の審査を行います。応募締め切りは5月31日（月）。詳しくはホームページ（www.sankeisquare.com/scholarship/）で。問い合わせは、日台スカラシップ事務局（産経新聞社メディア営業局内、電話03・3275・8656、FAX03・3275・8932）まで。

産経新聞（全国版）　2021年1月29日付

日台スカラシップ　応募受け付け

産経新聞社とフジサンケイビジネスアイは、将来の日台友好に貢献する人材を育てることを目的に「第18回日台文化交流　青少年スカラシップ」を実施します。作文とスピーチの２部門で学生を募集します。

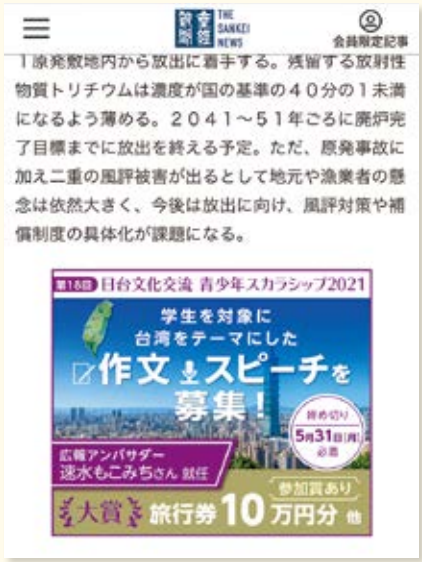
【作品応募締め切り】2021月５月31日必着
【テーマ】台湾に関すること
【応募項目】◇作文部門（言語：日本語）
文字数：2000字以内書式：Ａ４サイズ原稿用紙縦向き、横書き20字×20行（推奨）※パソコン、手書きはどちらでも可
◇スピーチ部門（言語：中国語・台湾語）
論文審査：スピーチで主張する内容を中国語（繁体字を推奨）で３分相当の文字数の論文にまとめてご応募ください。また日本語訳も添付してください。
本審査：論文審査通過者を対象に中国語または台湾語でスピーチしていただきます。（両方も可）
※応募資格、規定はホームページを確認。
【各賞】◇大賞２名（各部門１名）
◇優秀賞　12名程度
◇奨励賞　20名程度
◇佳作　数名程度
大賞には賞状、旅行券10万円分。優秀賞には賞状、旅行券５万円分。奨励賞、佳作には賞状を贈呈。大賞および優秀賞受賞者は８月に実施予定のオンライン交流会にご招待します。応募者全員に台湾グッズを参加賞として贈ります。
【発表】2021年８月のフジサンケイビジネスアイ、産経新聞紙上
【問い合わせ先】日台スカラシップ事務局（産経新聞社メディア営業局内）〒100―8079　東京都千代田区大手町１の７の２
電話03・3275・8656、FAX03・3275・8932、E―mail　scholarship@sankei.co.jp、ホームページ　www.sankeisquare.com／scholarship／
共催：台北駐日経済文化代表処
協賛：JR東海、三井物産、台湾新聞社
協力：外交部（台湾）、教育部（台湾）、台湾日本関係協会、台湾観光局
後援：日本台湾交流協会、自由時報　（順不同）

フジサンケイ ビジネスアイ（全国版）
2021年1月29日付

iza（イザ!）
2021年4月12日付

産経ニュース
2021年4月12日付

作品募集パンフレット



産経ニュースSPレクタングル
2021年4月12日～5月10日

作品募集ポスター

フジサンケイ ビジネスアイ　作品募集広告

産経新聞　作品募集広告

宣伝・PR、メディア掲載報告

日台スカラシップ　大賞に葉山さん、山内さん

日本と台湾の若者による文化交流の促進を目的とした「第18回日台文化交流青少年スカラシップ2021」（主催・産経新聞社、共催・台北駐日経済文化代表処、協賛・JR東海、三井物産、台湾新聞社）の受賞者が決まった。作文とスピーチ（中国語・台湾語）の2部門で388点の応募があり、作文部門の大賞には、葉山瑠さん（早稲田大学4年）＝写真右＝の「青緑の双眸の向こうに」が、スピーチ部門の大賞には山内佳祐さん（佐賀大学3年）＝同左＝の「日本と台湾の架け橋として」が選ばれた。大賞、優秀賞の受賞者には旅行券が贈られるほか、台湾の若者とのオンライン交流会も実施する。

優秀賞の受賞者は以下の通り。（カッコ内は学校名、学年。敬称略）

【作文】大家衣穂理（奈良県立青翔高等学校3年）▽座間耀永（青山学院中等部3年）▽野口祈桜（南山大学4年）▽増尾諒一（東京大学教育学部附属中等教育学校高校1年）▽松室美胡（広島県立広島叡智学園中学校3年）▽美好愛華（東京学芸大学附属世田谷中学校2年）▽山口彩（東京大学教育学部附属中等教育学校中学3年）

【スピーチ】河野共喜（元培医事科技大学大学院1年）▽谷俊作（大阪大学4年）▽田村夏琳（関西学院千里国際高等部2年）▽廣松佳依（東京中華学校高等部2年）▽南愛莉（青山学院大学4年）

産経新聞
2021年8月3日付

「日台スカラシップ」大賞に葉山さんと山内さん　受賞者決まる

SankeiBiz　2021年8月3日付

「日台スカラシップ」大賞に葉山さんと山内さん　受賞者決まる

日本と台湾の若者による文化交流の促進を目的とした「第18回日台文化交流　青少年スカラシップ2021」（主催・産経新聞社、共催・台北駐日経済文化代表処、協賛・JR東海、三井物産、台湾新聞社）の受賞者が決まった。作文とスピーチ（中国語・台湾語）の2部門で388点の応募があり、作文部門の大賞には、葉山瑠(はやまよう)さん（早稲田大学4年）の「青緑の双眸の向こうに」が、スピーチ部門の大賞には山内佳祐(やまうちかゆう)さん（佐賀大学3年）の「日本と台湾の架け橋として」が選ばれた。大賞、優秀賞の受賞者には旅行券が贈られるほか、台湾の若者とのオンライン交流会も実施する。

優秀賞の受賞者は以下の通り。（カッコ内は学校名、学年。敬称略）

【作文】大家衣穂理（奈良県立青翔高等学校3年）▽座間耀永（青山学院中等部3年）▽野口祈桜（南山大学4年）▽増尾諒一（東京大学教育学部附属中等教育学校高校1年）▽松室美胡（広島県立広島叡智学園中学校3年）▽美好愛華（東京学芸大学附属世田谷中学校2年）▽山口彩（東京大学教育学部附属中等教育学校中学3年）

【スピーチ】河野共喜（元培医事科技大学大学院1年）▽谷俊作（大阪大学4年）▽田村夏琳（関西学院千里国際高等部2年）▽廣松佳依（東京中華学校高等部2年）▽南愛莉（青山学院大学4年）

産経ニュース　2021年8月3日付

宣伝・PR、メディア掲載報告

23 【産業特集】12 令和3年(2021年)8月28日 土曜日 産経新聞

企画・制作/産経新聞社メディア営業局

第18回

日台文化交流 青少年スカラシップ 2021

日本と台湾の新時代を拓く

日本と台湾の青少年による文化交流の促進を目指す「第18回日台文化交流 青少年スカラシップ」(主催=産経新聞社、共催=台北駐日経済文化代表処、協賛=JR東海、三井物産、台湾新聞社)。今回は作文とスピーチ(中国語=台湾語)の2部門で学生の作品を募集し、365点の応募があった。大賞には、葉山璃さん(早稲田大学4年)の作文「青緑の双眸の向こうに」と、山内佳祐さん(佐賀大学3年)のスピーチ「日本と台湾の架け橋として」が輝いた。

大賞 作文部門

青緑の双眸の向こうに

早稲田大学4年 葉山 璃

大賞 スピーチ部門

日本と台湾の架け橋として

佐賀大学3年 山内 佳祐

優秀賞 作文部門

優秀賞 スピーチ部門

主催:産経新聞社
共催:台北駐日経済文化代表処
協賛:JR東海 MITSUI&CO. 台湾新聞社
協力:外交部 教育部 台湾日本関係協会 Taiwan 台湾観光局
後援:日本台湾交流協会 自由時報

審査委員

渡辺 利夫(拓殖大学 顧問)

作文部門審査委員

張 温恭(台北駐日経済文化代表処 広報部 次長)
河合 哲子(東京大学大学院 教授)
宝槌 勲(株式会社キャノンコンサルティング 代表取締役)
林 翠儀(国語月報 東京特派員)
河崎 眞澄(産経新聞 論説委員)

スピーチ部門審査委員

蘇 歌誠(台北駐日経済文化代表処 広報部 部長)
馮 彦蕾(横浜中華学校 理事会秘書長)
呉 育珊(東京中華学校 国語主任)
林 翠儀(国語月報 東京特派員)
河崎 眞澄(産経新聞 論説委員)

産経新聞(全国版)　2021年8月28日付

第18回日台文化交流
青少年スカラシップに寄せて

産経新聞論説委員兼特別記者　河崎 眞澄

日台文化交流 青少年スカラシップは、日本にとって大切な隣人「台湾」との交流を次の世代に引き継いでいく人材の発掘と育成をめざして創設され、今回が第18回目となりました。この国際貢献プログラムの価値をお認めいただき、支援を続けてくださっている台北駐日経済文化代表処や企業のみなさまに、改めて御礼を申し上げます。創設当初から私自身、台北支局長として交流の場をアレンジし、数多くの笑顔と友情、涙と感動に触れてきた貴重な経験があり、その意義をいま改めて、かみしめています。

第18回は前年に続き、新型コロナウイルスの感染拡大に鑑み、再び台湾研修旅行を断念せざるを得ない事態になりました。しかし日本と台湾はこの先もずっと家族です。感染の終息をまって台湾を訪れ、あるいは台湾の方々の来訪を日本で受け入れて、改めて日本と台湾の心の交流を深めていきましょう。そして隣人どうし、長い歴史が紡いできた日本と台湾の絆は、新型コロナなどには決して負けないことを証明しましょう。

作文とスピーチの2部門あわせ388人もの応募があり、ここから選ばれた14人のみなさんとの8月18日のオンライン交流会は、ほんとうに有意義でした。一例ですが、作文部門で大賞に輝いた早稲田大学の葉山瑶さんや、スピーチ部門で入賞した関西学院千里国際高等学校の田村夏琳さんが、ご両親のどちらかが台湾人であることを題材にしていました。交流会で私がお話したのは、このお2人に限らず、日台それぞれにルーツをもつ誰もが「ハーフ」ではなく、幾重にも折り重なるすばらしい「ダブル」の歴史的な背景があることを、もっと誇りに思って大切にしてほしい、ということでした。血筋だけじゃありません。台湾に惹かれて、もっと台湾を知りたいと思う気持ちを抱いたみんなが、日台「ダブル」のパワーをもっていると思うのです。

交流会で入賞者のみなさんの目は、オンラインで見ていてもはっきりわかる輝きがありました。そして笑顔もとびきりいい。言葉に響きがある。自分の将来の方向性を明確に描いていましたね。外交官だったり、弁護士だったり、食の文化研究だったり、教育の世界への興味だったり。どんな職業でも、ますます国際的な感覚と言語能力、精神力や行動力がダブル・トリプルで求められる時代です。この日台スカラシップでのご縁をもっと広げて、連絡を取り合い、自分を磨き、それぞれの世界に羽ばたいていってください。

日本も台湾も、度重なる震災や水害、そして混乱の時期を乗り越え、平和な時代と繁栄を築いてきました。その結果、互いの善意が善意を呼ぶ「善の循環」がしっかり回っていることは、誰もが実感していることです。英知と勇気に満ちた日本と台湾の人と人にとって、互いの信頼感さえあれば、この先もいっしょに克服できない困難などありません。未来に向かってきょうも一歩、あすも一歩、あさっても一歩、進んでいきましょう。

第18回日台文化交流 青少年スカラシップ2021 実施報告書

発行・編集：産経新聞社
印刷・製本：サンケイ総合印刷株式会社

日本と台湾の
新時代を拓く

主 催: 産經新聞社

共 催: 台北駐日経済文化代表処

協 賛: JR東海　MITSUI & CO.　臺灣新聞社 TAIWAN NEWS

https://www.sankeisquare.com/scholarship/